

速記教本

火田 田 日月・著

參議院速記者養成所

系者 言

この速記の方式は單画式であつて、本院速記者養成所第19期生（昭和39年4月18日入所）のために作製したものであります。

速記といふものは音声言語との戦いであります。知っていることは聞えることであり、聞えることは書けることに繋がります。反対に、知らぬことは聞き間違えし、聞き間違えば速記の体をなさないことにあります。この意味から、新聞雑誌その外、能限り読書見聞の幅を廣くすることが肝要であります。

近代の速記方式は、早い音声言語も「音声言語記録量」の関係において書けるように組み立ててあるものでありますから、そゝ早く手を動かして書く必要はありません。

莊子の人間世に「わたくしは禾（いね）をつくり、耕してこれを齒莽（うし）そんざいにしたところが、その実もまた齒莽なものができるてわたくしに報いてきた。藝（くさぎ）つてこれを搘裂、うんざつにしておい

たところが、その実がまたいい加減なものができるてわたくしに手を返つてきました。」といふ話があります。
速記において記線の正確であるということは生命であります。符号を粗略に書けばその報いは直ちに自分にはね返つて来ます。努めて自分の書く符号を大事にして、線の長短、角度、末端の揺らぎ、とめる、書記位置など、正確を保つよう心がけてほしいと思います。

火田 田 月

昭和 39 年 8 月 29 日

速記教本

目次

頁		
1	思うとその前後	30
3	にに続く用言	31
4	自か動詞	33
5	否定	35
6	動詞二音動詞	37
8	複合動詞	38
9	略字	40
10	不完全動詞略字	41
11	準動詞略字	42
12	動詞助動詞	43
13	助詞たてるよのつくもの	44
13	音便んだんでつたつて	45
14	語尾あれられの変化	46
15	語尾えられの変化	46
15	語尾あれせの変化	47
17	語尾あれす	47
18	語尾あれしめの変化	47
21	語尾あれしめの変化	48
22	否定	48
23	相手れ车いの変化	48
24	語尾あれ車いの変化	49
24	語尾え車いの変化	50
25	語尾あれ車いの変化	51
26	語尾えられ車いの変化	52
27	語尾あれせ車いの変化	52
27	語尾あれさをいの変化	52
28	語尾あれしめ車いの変化	53
28	語尾えられしめ車いの変化	53
30	動詞語尾さ車いりない等の記線の区別	54
27	鄭重語(まちの変化)	55
28	助詞	58
29	形容詞及び形容動詞	60
29	久活用	61
	志久活用	63
1	本速記方式の構成概念	
2	基本符号	
3	使用する線の種類と角度	
4	と長短	
5	清音符字	
6	濁音符字と半濁音符字	
8	撥音符字	
9	濁撥音符字と半濁撥音符字	
10	長音符字	
11	長濁音符字	
12	拗音符字	
13	拗濁音符字	
13	拗撥音符字	
14	拗濁撥音符字	
15	拗長音符字	
15	拗長濁音符字	
15	詰音の表現	
17	符字の連続方法と記線上の注意	
18	略記法省略法・略字の存在意義	
21	用言及び形式語	
22	形式用言、肯定	
23	あるの変化	
24	形式語	
24	のたの変化、たう	
24	いる、あるの変化	
25	なる、になる、とれる	
26	つたつて	
27	といふとその前後	
27	ある、とする、にするの変化	
28	こういふ、そいふ	
28	しまふの変化	
29	くる、みる、ととの前後得の変化	
29	仰しゃる、いらつしゃる 下りるの前後	

形容動詞	86
副詞	87
にの添; 副詞	88
置語	88
よ; な、よう; にの添; もの	91
のとおりの添; もの	91
かもしれないを含むもの	91
ところを含むもの	92
を得の入るもの	92
にしかかわらすの添; もの	92
ると、れば、すと、せばの添; もの	93
まで; ものに入る; もの	93
然としての添; もの	93
然たるの添; もの	94
田各字	94
接続詞	99
体言、形式体言	100
同行終字	101
字音	105
濁音符の应用	106
凡例に; のつくものの独立符字	107
主として後に使用する複字音符字	108
複字音と複字音の綴字例	117
成語 1	119
略字 1	123
名詞田各字	127
代名詞	135
数詞	137
成語略字ときまり言葉	141
符標の例	146
綴字例 No.1	148
No.2	150
No.3	153

本速記方式の構成概念

速記方式の構成は、その速記方式の使われる目的によって変わらなければなりません。本養成所では本院の速記事務に従事する員である者を養成するのが目的でありますから、速記方式の内容といふものは、本会議、委員会等、会議においての発言が書き取れるよう組み立てられていくなければならないことは当然のことであります。会議においての発言は、速いものもあり遅いものもあって区々まちまちであります。遅いものはとにかく、速いものは、たとえば(9国会本会議(昭29.3.17)における塙田国務大臣の地方税の一部改正、入場税譲与税、29年度揮発油譲与税改正の説明十分間3,600字、その前では第9国会本会議(昭25.11.29)で深川議員の発言3,436字という)があります。この速度は今記録部で使っている用字に換算すると、これより5%くらい引くことになりますが、どんな速い音声言語でも発言行為のある限り書き取れるものでなければなりません。

で本方式は、この速度に堪え、なお十分ゆとりを残すように構成しています。

本方式は、1音を1線で表現するのを原則とするところの單画式であります。長音符字、撥音符字は1線化してあります。濁音は渋

音符を添える ~~楽譜~~ 構成に在っています。

单画式の思想は、一言で言えば記線量のより少量化を目標とする記線の節約主義であります。手指運動の速さに限界のある以上、記線量の節約対策は頭脳の負担によつて行なうより方法がありません。頭脳の負担に乘負う分量が多くなればなるほど方式は複雑になりますが、手指による記線量はますます少なくなつてしまひります。また、そゝなればなるほど普通の速さの音声言語といふものは、より楽な手指運動によつて書き取れることになりますし、このことが延いては、より速い音声言語にも堪えられやすいといふ理屈になります。

この見地から本方式は語法から割り出して

1. 符字それ自身の形態の利用による 音韻記線の節約。
2. 記線位置の利用による 音韻記線の節約。
3. 条件符字による 音韻記線の節約。
4. 点の位置的利用による 音韻記線の節約。
5. 記線速度をできる限り均一化するためには、頻出度の高いことばの略字を設ける。

等々によつて構成がしてあります。

基本符字

音声言語を書き取って、それを文字言語に転換するためには、手指による限りは何らかの記号によるところの仲介物が必要であります。その仲介の手段として使ひのが線の種類であり点であります。線には直線、曲線があり、長短があり、遠近角度があり、濃淡があり、その記線の位置まで考慮に入れますと、線の種類は無限に近いほどあるわけであります。

ところが、音声言語といふものは、瞬時に起こり瞬時に消滅するものであります。すなわち音声言語といふものは停滞するものではなく、ある速度をもつて流れいくものであります。音声言語に遅速の差はあるにしても、ある速度のあることを考えますと、ある一音のために長大な線や複雑な線を当てますと、そのことは書き取らないうちには音声言語は先の方へ移行してしまうことになります、一音のために長大な線や複雑な線を送りますことは、速記符字としては根本的に不得策であるということになります。

そこで、曲線にしても直線にしても、符字として採用のできる線の長短といふものは、おのずから制限を受けることにあります。

線の角度といふことににおいても、曲線、直線少しづつ角度を変えれ

ば、線の角度は沢山得られるわけ"あります"が、あるスピードをもつて音声言語を書き記していくのは至って不器用な手指が行なうのであります。ところが速記といふものは符字を書きつ放してはその用をなしません。書いて固定化した符字は民族共通の文字言語に直さなければなりません。直すためにはその符字を読まなければなりません。書いた線を識別して正確に読みこなすのは、究極的には頭脳の判断活動によらなければなりませんが、直観的には視覚神経によって識別していくものでありますから、この面からも採用のできる角度といふのは制限されてまいります。

つまり、速記の方式は基本符字ばかりで成り立つものではあります。符字として採用のできる線の長短、線の角度、線の曲直といふものは、比較的書き分けられやすく、識別が可能な線といふよりは、基本符字の線といふものはおのずから掣引セイナカが加えられることがあります。

使用する線の種類と角度と長短

本方式においては直線、曲線、半円、円、橢円、鍵、線の末端を流す、止める、曲線においては定曲線と不定曲線、それから点を使用しております。

角度

0° — — — 315° \ \ \ / 225° / / /
 15° — — — 280° | | | 365° — — —
 45° / / / 270° | | | 225°)))

以上の線の種類を基本の角度として、大小長短、曲線の深浅、末端を止める、流す、点を付し、ときに鍵を付して基本符字を構成しています。

清音符字

えいueo及び半母音のwは表情の声が語源であります。この符字においても発音した口の表情の形象を取り入れて母音符字としてあります。

くえ行と七八行は、かがみ、つくえ、こおり、たたみ、てがみなどのように、心理的に直線的な事物を指す語彙が多いので直線符字としてあるし、ほかの行のものは はな、なみ、まり、のはら、などと、円味や弾ひやかな感じを与える語彙が多いので、符字の方は曲線を当てています。

清音は五十音ともいいますが、速記体音に即して書くために、実際には四十四字であります。

a	i	u	e	o	
u	n	t	v	r	
k	-	-	-	-	-
s,ʃ))	())
t,tʃ,ts	/	\		\	/
h)	-	u	-)
b)	c	c)	(
m	~	-	o	-	~
j	↖	-	↗	-	↗
r	↗	↘	↗	↘)
w	↖	-	-	-	-

実際に書き記していく符字の大小長短角度は、ここに規範として示した程度がいいのでありますが、大小長短の割合が保たれていれば、これより多少大き目の符字になつてもかまいません。

濁音符字と半濁音符字

濁音の頻出度はかなり高いので、糸泉に余裕があるならば別個の符字を用意したいのですが、記録運動によって歪曲された符字の壁別の確実さを考えると、他の線を求めることはできにくくなります。また古くからある線の濃淡法も、重筆圧への移行及びその脱出は相当研究のある問題なので、迂遠な方法ではあるが、加点法を採用しました。加点の位置は符字の中央部、糸泉にからず接觸して上側または左側であります。

濁音加点法は長濁音、擦濁音、拗濁音、拗長濁音にも応用します。濁音符字にはからず点を添える習慣をつけておかなければなりません。そうでないと、たとえば下記のものはほんの例であります。清音濁音の判別がつきません。

市價	時價	先例	前例	審問	証問	金	銀
降雨	豪雨	高慢	傲慢	無法	無謀	方略	謀略
選集	全集	返済	弁済	時機	時宜		

半濁音は Pa Pi Pu Pe Po の五音ですが、わが国語においては半濁音の元來種は副詞のほかなくて、熟語の場合に、語音もしくは擦音のあとにくる わえ行音が音便によつて半濁音と転化するのであります。

半濁音も加点法を使いますが、加点の位置は わえ行符字の左側中央に、符字から少し離れて打ちますが、国語転化音の場合には点を省

略してもよろしい。

a. i u e ɔ

g, ɔ - - - - -

ʒ) , < ɔ:)

d / \ x ɔ: /

b (ε c (ɔ: /

p (ε c (ɔ: /

撥音符字

ən ɪn ʊn eŋ oŋ

ə ɪ ʊ ɛ ɔ:

k - - - - -

s, ʃ) , () , ()

t, tʃ, ts / \ | \ / \ /

n (ε ʊ ɔ: / /

h (ε c (/ /

θ (ε c (/ /

m) ～ ～ ～
j (～ ～ ～
r) ～ ～ ～
w ～

濁 搓 音 符 字 と 半 濁 搓 音 符 字

濁音表示法と摺音字の混合であって、説明は省略します。ただし、
dʒinはʒinをdzunはzuŋの字符を充当します。

g, ʁ
z, ʒ) ～ (～)
d ～ ～ ～ ～ ～
b ～ ～ ～ ～ ～
P (～ ～ ～ ～)

長音符字

2行の長音はえを添え、1行の長音は丨を添えて表現します。2行の長音、1行の長音は、国語では擬声語のほかにないからであります。

u: e: o: は u e o に点を添えて表現します。re: は re の符字の左側やごろに点を添えて表現します。

nu: hu: ru: は曲線の深いもの、ju: は下から上へ流したもの、そのほかは長大な線であります。

u: e: o:

K



s



t (ts)



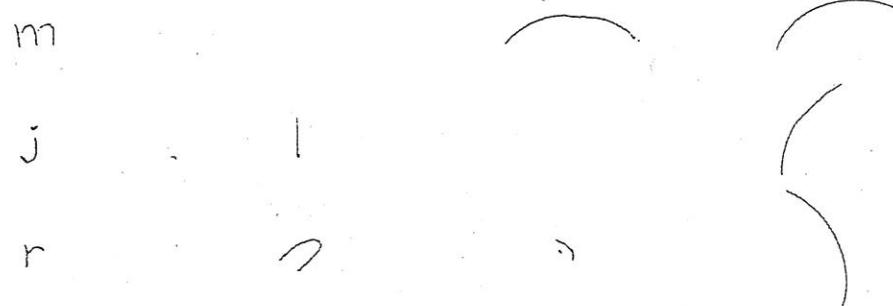
h



h



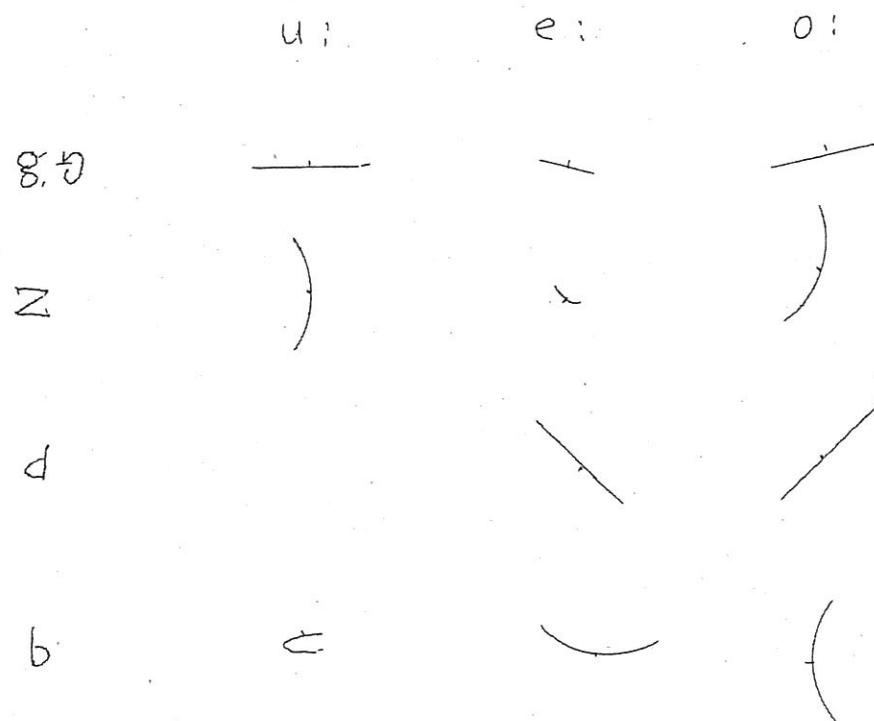
m
j
r



長濁音符字

長音符字に濁音表示の点を添えるだけで“あつて、dzu: は3 u:”
の符字を充當します。

u:
g, ぐ
n
p
b



拗音符字

拗音は熟音の一種で、清音と濁音の二種があります。一線一画もしくは鍵または点を添えた線でもって表現します。

kju, tʃu, nju, hju, mju, rju, mjo の符字
は不要なので省略してあります。

	エ	ウ	オ
kj	／＼	／＼	／＼
tʃ	／＼	／＼	／＼
nj	＼＼	＼＼	＼＼
hj	()	＼
mj	＼＼	＼＼	＼＼
rj	＼＼	＼＼)

拗音 濁音 符字

線の中央部に濁点を添えて表現します。

dʒu dʒu dʒo は、ʒu ʒu ʒo の符字で代用させ、
χju χju Bju の符字は不要なので省略してあります。

a u o

gj, ej ァ
z ィ
bj イ

拗音符字

拗音符字の末端を流して表現します。

ah un on

k ァ
s ィ
ts ツ
nj イ
rj イ

拗濁音符字

拗音符字に濁音を表わす点を添えています。

dʒən dʒən dʒən はʒən ʒən ʒən の符字で
代替します。

a n

u n

o n

g j, þ j

d z

拗 長 音 符 字

拗長音符字は、い列の e 列だけ（国語）であります。長音符字の場合のように、直線符字と深い曲線符字は線くを長大にして、湾曲の線くの深い山のは符字を大柄にします。そして加点あるいは符字の末端を流します。また、k j u: ø t s o: ó のように特別なものもあります。

u:

o:

u:

o:

k j

m j

s

r j

t s

前字

n j

前字

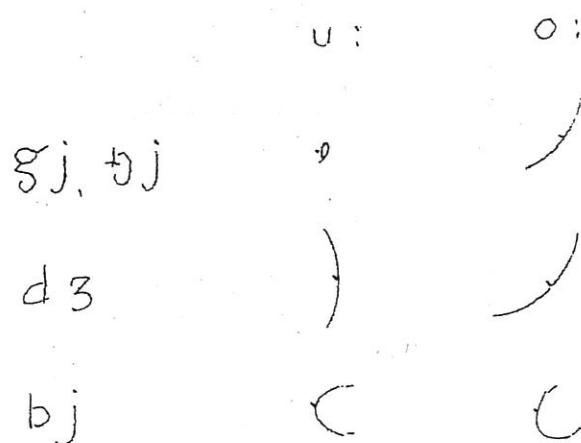
h j

前字

拗 長 濁 音 符 字

拗長音に濁点を添えて表現します。

dʒu: dʒo: はʒu: ʒo: の 符字で代替します。



詰 音 の 表 現

記録語を調べてみると、詰音の頻出度は案外低くて、音声言語の

種類の如何によつては 1%内外あるにすぎません。

この方式では 1. 詰音となる符字を前字の右斜下に書記されて表現するもの（主と（名詞と副詞）と、2. 前字に符字の先を交叉して動詞のソ音使ってを表現するものと、3. 前字右斜に助詞を接觸させて あつて を表現するものと用意しています。

言記系泉 例

1. 名詞、副詞 ○ は前字の位置

悪化	○ —	あつせん	○ の	压倒	○ /
一向	○ —	絶好	○ も	一種	○ も
一毛	○ も	蔑視	○ も	物價	○ も
末梢	○ も	剎到	○ も	月光線	○ も
執行	○ —	合算	○ も	ドック	○ も
ラッパ	○ も	原っぱ	○ も	ずっと	○ も
きっと	○ も	きっと	○ も		

2. 動詞って

こなつては ← を買つても →
せんだつても ← 固まつては →
水くが水くつて ←

3. あつて

目があつて ← 山であつて → 川もあつて ←

符号の連続方法と言記線上の注意

速記符号の綴り方は、左から右へ横書であります。基本符号ばかりの綴りの場合と、省略法、略記法、略字などを使用しての連続の場合とは多少違うところもありますが、大ざっぱにいって、符号綴りの段列が、あまり右下がりにならないように、品詞的にも切りがよいところは、長くても四画か五画くらいで切って書くのがよろしい。

速記とは、おかしなことに、自分で書いた符号が自分で読めなくなるたり読み間違えたりするものであります。それは手本として示された規範符号の視覚によります曲線直線の長短や角度や書記位置の正確さに対して、速度をもつて書いていく符号の線の長短や角度や位置に歪み^{ひずみ}が生まれてきたり、手指運動の関節の関係からか、心理的な関係からか、前に書いた線によって次に書く線の長短や角度が崩れやすくなる性質があつて、その歪みが生まれて参りましたために読めなくなるからであります。

こういふ誤りを防ぐためには、符号を丁寧に、しかも正確に書く習慣をつけることが肝要になってしまいます。そこで根気よく符号の習字を行なうこと指図いたします。

符号の習字を根気よく行なえば、符号の正確度が得られるばかりでなく、初歩のうちは条件反射の訓練にもなります。

略記法、省略法、略字の存在意義

本方式の基本符字は、一体どのくらいの音速にたえられるものか、概略であるが調べてみると、人によってもとより多少の差はありますか、大体一分間に

単画線(平均) 200回

撓音線 " 220回

長大線 " 150回

といふところであります。

撓音線、長大線を二音符字として換算します。

単画線(平均) 200音

撓音線 " 440音

長大線 " 300音

となります。

ある音声言語を基本符字ばかりで書き綴るとして、単音、撓音、長音の混合割合を調べてみると、原稿を持たない自由な発言(参議院委員会)一万字においては、

単音 29% 言吉音 1%

撓音 13%

長音 7%

といふ構成であった。これは調査の対象となる材料が遠い、用字が遠えば%が動いてくるらしいありますが、この現れた%を一つの参考として採り上げて、符号の具有する書記応能力に当てはめてみますと、（一分に換算して）

単音200音の79%は158音

複音440音の13%は57音2

長音300音の7%は21音

詰音 2回 2音分

で238音2あります。濁音は5%ないし6%くらいの頻出度を示しており、加点といふ二重の動作を考えますと、基本符号だけで書き得る速度はかなり低いものとなります。かりに238音を会議録から任意に抽出した漢字が左表に当てはめてみると、2%ないし2%5くらい減って、180字くらいから190字くらいの程度となります。これに練習による馴れをみましても、大して書き得る字数はふえません。ところが実際の言語活動は、本速記方式の基本概念のところで述べたように、当時の会議録用字例で、十分間3,436字、3,600字といふものがあつたのでありますからその差を塞ぐ方法を取らなければなりません。しかも速記の技術といふものは、いつも音声言語の速さより20%くらい余計書けるゆとりを持っていなければ満足のできる仕事といふのはで、きるもので

はありません。

この書き得ない差をどこへ転嫁して書けるよ)にすらか、速記は書かないのが理想でありますが、書くならば記線の少量化をはからなければ目的は達しません。

そこで問題は、音声言語をどういふに速記方式的に扱っていくかということになります。

音声言語には速度があり、限られた時間内に書き取らなければならぬといふ制約がありますので、あるいは文法的には、あるいは文法によらず、あるいは文法を超越して語法から割り出して構成する必要があります。

ある統制約束のもとにできるのが省略法なり略記法でありますが、我が国語の音韻的な構成上、全部の音声言語をこのように縛ることはできません、この点を補うものとして略字が必要となってきます。

略字といふものは元來便宜主義から用意するものであります。記線運動の平均性を保つといふ面から見ますと、単に便宜主義といふことで排斥すべきではありません。もっとも最小限度にとめておく必要があります。

要するに、根本的に音声言語の速度と記線の分量がマッチするようにするためには省略法、略記法、略字の存在が必要であるといふことにこれらの方の存在意義があります。

用言及び形式語

どんな言葉でも、その中の一つの語は、他の品詞との関連影響を受けて、その拘束の下に成り立っています。その関連性の最も強く現われているのが名詞と動詞の関係と、動詞と助動詞の関係あります。

音声言語には速度があります。この速度のある音声言語を規範文法によって書き分けたり処理していくには、速記方式として符号の綴りに速度性を持たせることはできません。その速度性を持たせるために、名詞に対する動詞、動詞に附属する助動詞の相関の性質を利用することが必要となつて参ります。この方式はそのように発展させていくのですが、何事にも例外のあるように動詞にも例外があります。それは語尾が二行にわたる動詞があることあります。その多くのものは語尾R行とS行のものですが、これらは詩線において区別をすることが必要あります。

参考のために、動詞の語尾R行のものとS行のものを挙げますと

起る	余る	返る	戻る	流す	浊る	帰る	寄る
下る	移る	隠す	通す	ダジマ	湿る	倒る	覆す

減る
映る
宿る
直る
上る
渡る
汚る
潰す
捨る
被る
倒る
代る
見る

その外の行のものでは

選ぶ
燃ゆ
抜く
放す
匂く
煽る
越す
喰ふ

煮ゆ

別字でありますが符字に区別の要るものとの例として

表わす・現わる 過つ・誤る 戻す・借る 惣す・覚す

成る・為す 惑う・迷う 至る・致す

などが挙げられます。

形式用言

形式用言といふのは、実質語として自主的に述語となることがで
きるのではありませんが、時にはその自主性を喪失してしまって、形式
的にほかの言葉に附属して、ある意味を添えるだけの場合がありま
す。

肯定

ある の 変化

ある、である（あろ）、であろ；を除いて) の変化の前は体言であって、のであるの前は用言であります。

であろ；、のであろ；の前は用言でありますか、であろ；の前が体言のことともちらんあります。そこで、であろ；と のであろ；の符号に区別をつける必要があります。

	る；	り	る	れば	つた	つて	つたる；
あ	○	○、○	・○	○	○	○	○
であ のであ あ	○ ○ ○	○、○	・○	○	○	○	○
かあ	○	○	○	○	○	○	接
しあ	○	○	○	○	○	○	接
ことであ	○	○	○	○	○	○	接
ものであ	○	○	○	○	○	○	○
わけであ	○	○	○	○	○	○	○
はずであ	○	○	○	○	○	○	○
ところであ	○	○	○	○	○	○	○
だけであ	○	○	○	○	○	○	○

ことであるから下のものは形式語との組み合せであります。

形 式 語

ついでに掲げますと。

こと もの 一 わけ はす へ ところ な
だけ |

の た の 変化

た の だつた だつて
○ ○ ○ 、

だつて

だつて ○

いる ある の 変化

いる ある は形式動詞でありますか、その変化の おり
は、もちろん実質動詞にも名詞にも利用して構いません。たとえば
おり紙 ～ 入会 ～ のように。

いる はつ または。、おりはく ある はつ

ろ； り る れば つた つて つたろ；

い …… く
お も の う く く ？ ④)
してい こ く
してお も の う く く ？ ⑥)

している してある の変化は、前符号から続けて書きます。

綴字例

こうしていると → どうなつていてか

そ； していると の感じておるのは、

しておつたのは う のは へ

なる になる となる

頻度の多い言葉であり、その変化には、前後を繋ぐ役目のものもあるので簡略にしてあります。

ろ； り る れば つた つて つたろ；

な も こ こ こ う あ う) 25

る； り る れば つた つて つたる

にな

g o o a

△

o

Q

()

とな

g o o a

↑

△

()

に相な

g o o a

△

o

()

と相な

g o o a

△

o

絃字例

なつたので ～ なつたのである ～ なつたことは ～

ことになるのである ト ことになるので ト

ことになつたのは ト ことになつたのである ト

ことになつては ト ものとなつたのだ ト

こととなつてゐる ト ことになつてゐるのは ト

つたつて

△

△

△

絃字例

なつたつて ～ いつたつて ト みたつて ト

といつたつて ～ なんといつて いるから ト

なの なん のあと

だ で であつた であつて である である

なの ～ ～ ～ ～ ～ ～

なん ～ ～ ～ ～ ～ ～

くる みる と その 前後 得の変化

くるは、加変来るの変化のもので、て で を直前にする形式動詞と見られる面をもつてゐるもので、この符号は音の変化によつて符号を変えます。

みるは、下一段(例、あげて) 上一段(似て) 加変(きて) 佐変(左して) のほかは、て で は音便形に来ます。

	よ	た	て	る	れば	た
來	・	フ	ヘ	〇 ₁	〇 ₆	〇
なつて來	Q	Q	Q	Q	Q	
とんで來	ハ	フ	ヘ	イ	ル	ト
見	・	フ	ヘ	・	・	ト
なつてみ	Q	Q	Q	Q	Q	Q
よんでみ	ハ	フ	ヘ	ハ	ハ	ト
得	・	〇	〇	② ③	〇	〇
仰しやる	い	リ	シ	ヤ	ル	シ
いらつしやる	イ	ラ	ツ	シ	ル	シ
下さる	シ	サ	ス	ル	ル	ル
の前後						

形式用言であるが、この変化は少ないのであります。

します の 変化などがあります。

した	して	する	しょ)	すれば	すると
○	、	।	、	、	△
と	△	△	○	△	△
に	△	△	○	○	○
と	○	○'	○'	○	○
に	○	○'	○'	○	○

こうい； そういう

形式動詞と見るべきものであります。

こうい； ————— そういう)

しまう の 変化

形式動詞であります。これの変化は四段であります、その外に連用形の音便形があります。

やい； つた つて そば うと
しま へ △ 〇 ～ ～

終級字例

どうなつてしまつたのであるか

くる みる と その前後 得の変化

くるは、加変來るの変化のしので、て で を直前にする形式動詞と見られる面をもつてゐるもので、この符号は音の変化によつて符号を変えます。

みるは、下一段(例、あげて) 上一段(似て) 加変(きて) 佐変(在して) のほかは、て で は音便形に来ます。

	よ	ん	た	て	る	れば	た	い
來	・	・	フ	ヘ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ
なつて來	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ
とんで來	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
見	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ
なつてみ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ
よんでみ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
得	・	・	〇	〇	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ

仰しやる いらっしゃる 下さる の前後

形式用言であるが、これの変化は少ないのであります。

る つた つて れば

おっしゃ	△	○	△
いらっしゃ	△	○	○
下さ	○	○	○

思うとその前後

いふ つた つて えば つて ある

思 思 } ふ く い う う う

思うの変化は動詞ですが、頻出度が高いので、ここへ入れておいたのであります。

つたつて

つ音便で、これもここが適当と思うのでここへ入れてあります。

例 なつたつて こ そ) 言つたつて))

綴字例

こうなつてくるとしたならば ーー そ) 見ても /

出てきた > となつてきた サ

して下さらんか シー

に に 続く用言

助詞の に には、おいて ついで に対して 関して 存して 等等に 続く 言葉が ありますし、その 鄭重語が 続く ものが あります。それらの 言葉は 頻出度が 相当高いので、これらを、助詞の に を 含めて 記録の 少量化を 図って あります。

書記位置は 右斜上 であって、鄭重語は によりまして になりまして の外は 右斜下 であります。

に おいて に について に 基 いて

	いて	ける	き	く	いた	ましまして	ます
にあ	○	○	○	○	○	○	○
につ	○		○	○		○	○
に基	○	○	○	○	○	○	○
の下にあ	！	！	！	！	！	！	！
の上にあ	！	！	！	！	！	！	！
についた	△						

による に至る に当たる に亘る

による の 変化は、に至る に当たる に亘る に比べて 頻出度
高い。

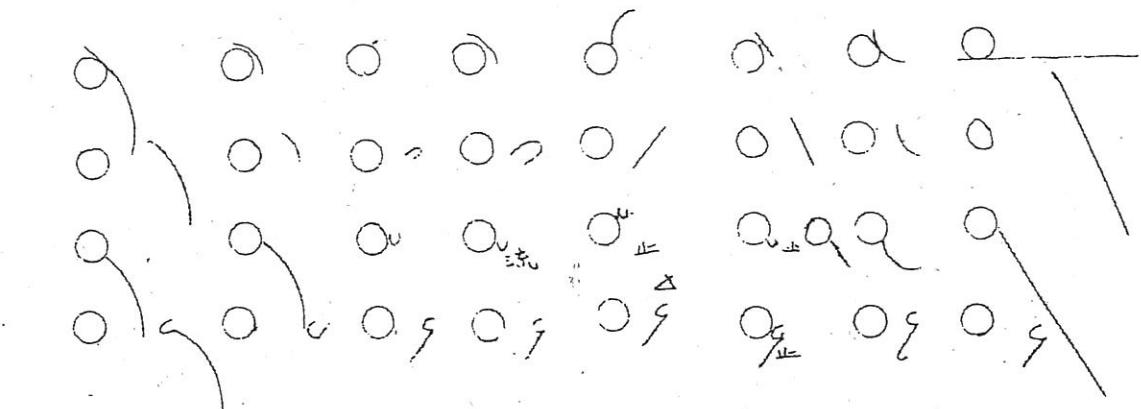
る らん リ る つた つて れば りまして

いよ

に至

に当た

に亘



に付し に關し に属し

に付し の頻出度は に關し の変化の頻出度より多いものであります。

し す し て す る し た し ま く し ま す

いよ

に關

に属

に伴

に伴

ま い つた て ま して



助 動 詞

形式語で、語形変化を持つてあります。

なり やり たり なきる の変化

ら らば らん り る た て う れば

な い く ろ そ ー ー ー ー ー ー

や ー ー ー ー ー ー ー ー ー

た ー ー ー ー ー ー ー ー ー

なき く ろ そ ー ー ー ー ー ー

ことにならなければ へ ことにならなければならん へ

ことにならなければならぬ へ

です の変化

しよ し た す

で も 止 無

ので も も も

終 漢字例
なのでしよか へ なんでしよか へ

べし ごとし の変化

く し き ければ くんば

べ ○、○、○、○、○、

ごと ○、○、○、○、○、

その他の助動詞略字

たい | まい、あるまい ○ する | たし ✓
よ△ (省略のできない場合は ✓ と書く) した ○△

れる、られる、らい、やせる、せられる などは動詞助動詞の
ところを合わせて説明します。

略字	なからしめ	～	なからしむ	～
	なからしめる	～	なからしめて	～
	なからしむ	～	なからしむる	～
	なからしめた	～	なからしめたる	～

否定

ない の 変化

ない は 形式用言 の 中の 一つで あります。ない が 動詞 に 続く 場合 は 助動詞 で、 動詞 以外 の 語言 に 附属 した 場合 には 形容詞 と なりま すし、 形式形容詞 は ない といふ 一語 だけ で あります。

ない 単独 の 変化

かろ； かつた い く し ければ

な ○ ○ ○ ○ ○ ○

応用例 なかつたろ； ○ ならない ○ ならなかつた ○

ない と その 前後

ある の 変化 の 場合 に、 で の で では が の も 等、 助詞 を 含めた 符号 の 掲載 を しました。 そこで、 ここ には、 それら に 見合ひ 否定 を 掲載 します。

ない の 前 の 符号 で、 その 前 に 書いた 符号 を 切つて ない の 変化 を 表現 する 方法 を とります。

なかろ；なかすた ない なく なければ なければ
ならん なければ
ならぬ

が	○	○	○	○	○	○	○
れ	○	○	○	○	○	○	○
で	○	○	○	○	○	○	○
は	○	○	○	○	○	○	○
の	○	○	○	○	○	○	○
し	○	○	○	○	○	○	○
ので	○	○	○	○	○	○	○
でも	○	○	○	○	○	○	○
では	○	○	○	○	○	○	○

関連級字の例 場所がなくちや もうしなくちやならん

そして車きやなし ✗ もうで車きやならない ✗

ありはせんか とー=と しはせんか とー=と

なりはせんか とー=と

なさ	○	○	○	○	○	○	○
なら	○	○	○	○	○	○	○

応用例

來	○	○	○	○	○	○	○
見	○	○	○	○	○	○	○

重力 詞

二音動詞

重詞の語尾は只行のものが約三分の一を占めていて最も多く、K行 S行、M行、H行のものがこれに続いてあります。

動詞は名詞との関連によって用語用法が決定するものであって、名詞が書いてあり、名詞に続く動詞の語根まで書いてあれば、肯定否定の別を抜きにすれば、語根だけで重詞であることがわかるのであります。

ここでは、始めに動詞のうち二音のものを取り扱います。語尾只行と他の行とは、区別の必要上二段に分けて取り扱います。

語尾只音の行のものは、一部例外のものはかは、撥音符字をして語尾只行の二音動詞として読みます。

U ri ru	Ka ri ru	-	Ko ri ru	-	Ke ri ru	-
Sa ri ru	Si ri ru)	Su ri ru	(So ri ru)
ta ri ru	tSi ri ru	/	tu ri ru	/	to ri ru	/
ni ru	hu ri ru	U	ne ri ru	-	no ri ru)
ha ri ru	hi ri ru	o	hu ri ru	c	ho ri ru	(
ma ri ru	mu ri ru	n	mo ri ru	~	ja ri ru	c
ju ri ru	jo ri ru	(wa ri ru	c		

例外のもののはち符字の変わるものには

ori → oru ↗ hari ← naku ←
deru \ kuru ○ seri ↗ miru ← heru ↘

書記位置は

- △ ……語尾 ri の場合の次の符字の書記位置
△ ……語尾 re の場合の次の符字の書記位置

綴字例

メリリ取りの 一 二 雨が降るの い = 一二〇

丸三年間 () 一 満五年間 一一一

三音動詞

仰き	マ	集め	ム	送る	ル	選ぶ	ル
動き	リ	送る	ル	固める	ル	括る	ル
殺す	ス	訓む	ム	進む	ム	注ぎ	ム
助く	ク	置く	ク	縮む	ク	包む	ム
尽くす	シ	屈く	ク	流す	ス	自らくる	ル
盗む	ム	狃る	ル	除く	ル	残る	ル
残る	ル	空む	ム	運ぶ	ブ	奪む	ム
結ぶ	ル	庚む	ム	宿す	ス	宿る	ル
許す	ス						

複合動詞

複合動詞の組成の有様は、二音目が「列の音、七列の音のものが大部分なので、ここでは二音目が「列のものと七列のものを取り扱います。名詞形にシを使います。

ト行を除いて「列のものは。」を付し、七列のものは省略して表現するのを原則としますが、申しのように。を付さない場合もあります。

縦字例	行き遠 ^{ミテ}	行き詰 ^{キツ}	意氣込 ^{ミダリ} <small>(応用)</small>
受け取 ^ル	レ 受け合 ^ル	ル 受け繼 ^ル	ル 打ち切 ^ル
打ち消 ^す	ス 落ち着 ^く	ク 推し量 ^る	ク 押し切 ^る
貸し付 ^す	ス 貸し出し ^ア	ア 貸し借 ^リ	ア 挂け合 ^シ
掛け金	一 駆け出 ^す	ス 差し出 ^す	ス 差し引き ^{シタマツキ}
差し当た ^り	リ 差し抜 ^キ	キ 差し障 ^る	キ 差しあき ^{シタオキ}
差し加え ^る	ル 差し繰 ^る	ル 流立 ^る	ル 立ち会 ^{シタガミ}
立てかえ ^ル	ル 建て直 ^す	ス 投げ出 ^す	ス 投げつ ^ス
逃げ出 ^す	ス 拔き出 ^す	ス 拔け出 ^す	ス 吐き出 ^す
引き受 ^う	ウ 引き継 ^ぐ	グ 引き締 ^め	ム 引き出 ^す
引き渡 ^す	ス 引き揚 ^ぐ	グ 引き取 ^る	ル 申し入 ^ル
申し上 ^げ	ヘ 申しわけ ^ス	ス 申し立 ^ス	ス 申し込 ^ミ
申し合 ^わ	ワ 申し渡 ^す	ス 申し述 ^べ	ベ 叫びつけ ^ル
申し起 ^す	ス 叫び出 ^す	ス 叫びと ^ス	ス 読み上 ^せ
見込 ^る	ル 見越 ^す		

田名字

ありがたい	アリガタク	アリガタク	アリガタク	アリガタク	アリガタク	アリガタク
誤る	ウル	過ち	ル	改め	ル	改め
争う	アリ	怪しそう	アリ	上回る	アリ	いたださき
いただい	アリ	いただいた	アリ	いたださきたい	アリ	伺う
承る	アリ	疑う	アリ	移す	アリ	移る
促す	シテ	動き	シテ	動かす	シテ	失う
行なう	シテ	行なわれ	シテ	行なわれる	シテ	行なわれて
行なわれた	シテ	趣向	シテ	齊す、思召す	シテ	陥る
落ちつい	アリ	落ちつき	アリ	落ちついた	アリ	及ぶ
及ぼす	シテ	片づいて	アリ	片づき	アリ	片づいた
片寄る	アリ	片寄った	アリ	片寄って	アリ	軽ん
顛覆	アリ	顛覆	アリ	金盤	アリ	金盤みる
金盤みる	アリ	縁り返す	アリ	縁り返して	アリ	覆す
覆る	シテ	企て	シテ	試み	シテ	試みた 月要だめ
試みる	シテ	試みて	シテ	こしらえ	シテ	こしらえた
こしらえて	シテ	こしらえる	シテ	こいぬが	シテ	こいぬがやくは
答える	シテ	差しつかえ	シテ	さげすま	シテ	妨ぐ
方げて	シテ	走る	シテ	損	シテ	備え
尋ね	シテ	木集る	シテ	持つて	シテ	嗜む

たつとがる	とつとがる	見字	見しも
達る	つかさどる	伝わる	続く
続いて	つづけて	続ける	続けた
引き続く	引きつづいて	頼る	償う
整える	なげのき	頬	長引き
述ぶ	話す	はかどる	ほかる
はばかり	拂ふ	初め	始まる
ひもどき	ひもがえす	ひもがえり	ひもがえる
施す	渡す	滅ぼす	入る
間違	まとも	まとめ	まとめらる
まとまる	まとまたた	まとまって	免る
見通す	見積もる	認む	認め
むさぼり	結ぶ	結びつき	結びついで
結びついだ	用う	用いる	用いた
用いて	もたらす	もらう	申し添え
申しがたい	しがたい	なしがたい	ありがたい
許す	横たわる	喜ぶ	喜ぶ
わだかまる	わざらう	できた	できて
できる	でき得る	できるだけ	吉岡 ぐりや
不完全動詞田名字	能わず	能わざる	しかず

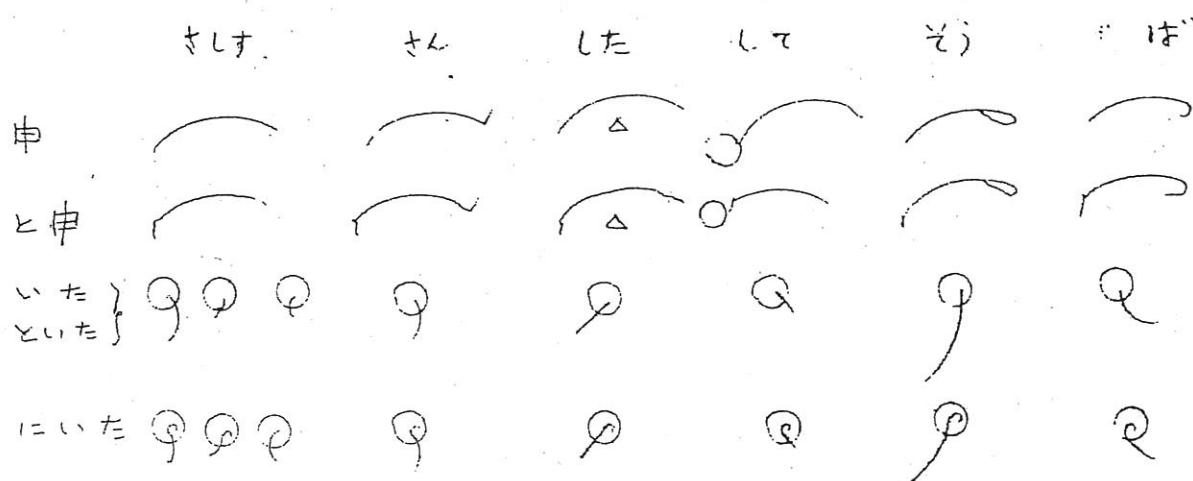
準動詞 略字（鄭重語）

動詞助動詞の略記法による符号の画数と調和がとれ了よに作った
略字であります。ここに掲げた言葉は根本語に属するもので、記録
語の中でも頻出度の高いものであります。

お伺い	←	お尋ね	/	お答え	/	お詫	←
お示し	↙	お説	↙	お願い	↙	お述べ	↙
お断り	♂	お調べ	↙	お気持	♂	お気の毒	♂
お心持ち	←	お返事	↙				
御存く知	↑	御存じ	/	御考慮	↙	御了解	—
御了承	—	御意見	人	御記憶	↗	御覽	↙
御面倒	↙	御連絡	↙	御準備	↙	御指摘	↖
御答弁	↙						

謙譲語

申す いたす 参る の変化



らりる らん つた つて うる れば
 参 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

尊 故 語

おっしゃる いらっしゃる される なされる の変化

らりれ る つた つて うる れば
 おっしゃ り し り し り し
 いらっしゃ り し り し り し
 され 〇 続 〇 〇 〇 〇 → 〇 〇
 なさ 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 れる れた れて
 なす 〇 〇 〇 〇
 なさる 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 なさるる 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 なさらん 〇 〇 〇 〇 〇 〇

動詞 助動詞

速記の語写能力が大きいかどうかということは、適性の個人差を問題にしなければ、動詞と助動詞の関係がよく整備されているかどうかによって決まるといつていいくのであります。

動詞の語尾に た て 了 よう が附属してその動詞の状態は詳しいものになります。動詞はその前に居かる助詞を中心として名詞によって語が支配決定されるものですから、動詞は二音の

ものでも三音以上のものでし、語根までの符号さへ書いておけば事
足りるわけのものであります。これは、語尾変化以下は一々丁寧に
符号で書かなくても、符号程度のものを添えるだけでもいいという
ことを意味します。

この方式では、簡単な符号を添えるものと、語根符号それ自身を所
定の場所に書いて変化を表示するものと、二つ方法をとつてあり
ます。縦に長い符号や二字以上符号を綴る際は前者の方法をとりま
すし、横に書く符号、二字で綴る二線のものは後者の方法で書くよ
うになります。

助詞 た て る よう の つく もの

重音詞語尾に た て る よう の つく ものは、その位置は

A

(吉言) 語尾え列が
(木既) 語尾え列て

(吉言) 語尾え列る
(木既) 語尾え列よ)

(吉言) 語尾え列れは
(木既) 語尾え列れは

例	た	て	る	れば	ねば	よう
見え	一	ハ	一	ハ	ハ	一
超え	一	一	一	一	一	一
寝え	一	一	一	一	一	一
消え	一	ハ	一	ハ	ハ	一
退け	一	ハ	一	ハ	ハ	一

	た	て	る	れば	ねば	よ
挙げ	上	下	中	左	右	中
分け	上	下	中	左	右	中
立て	上	下	中	左	右	中
述べ	上	下	中	左	右	中

B 語根符字の書記位置とその符字の形によって表現する方法。符字の縦に長いもの、二線(三線)綴じものはAの方法によるを原則とします。

	た	て	る	れば	ねば
取り挙げ	上	下	中	左	右
繰り上げ	上	下	中	左	右
締め	○	○	○	○	○
間違え	○	○	○	○	○
音便	んだ	んで	つた	つて	

この「んだ」「つた」は次の符字を上へ、「んで」は「て」を省略し、「つて」はその語根符字を前字の端の方で交叉させて表現します。

	んだ	んで	つた	つて
読	△	△	一	○
飛	△	△	△	○
咬	△	—△	△	○

語尾あ列れ の変化

(言)
木
良

語尾あ列れた
語尾あ列れて
語尾あ列れる

→ 語尾あ列れよ;
→ 語尾あ列れねば;
→ 語尾あ列れれば

(言)
木
良

語尾
あ列るる

	た	て	る	れば	ねば	よ;
知られ	ト	ツ	ハ	ル	ル	ト
来られ	イ	イ	イ	リ	リ	イ
頼まれ	シ	シ	シ	シ	シ	シ
与られ	ツ	ツ	ハ	ル	ル	ツ
思われ	シ	シ	ハ	ル	ル	シ
飾られ	フ	フ	フ	フ	フ	フ
申され	~~~~~					
といわれ	~~~~~					

語尾え列られ の変化

(言)
木
良

語尾え列られた
語尾え列られて
語尾え列れる

(言)
木
良

語尾え列られよ;
語尾え列られれば

語尾え列
られねば

	た	て	る	れば	ねば	よ;
決められ	ヘ	ヘ	ヘ	ム	ム	ヘ
述べられ	ヘ	ヘ	ヘ	ム	ム	ヘ
集められ	ヒ	ヒ	ヒ	ム	ム	ヒ

語尾あ列せ の変化

(語
末
良)
語尾あ列せた
語尾あ列せて
語尾あ列せる

(語
末
良)
語尾あ列せよ;
語尾あ列せぬ;

語尾あ列せねば

た て る れば ねば よ;

見させ ～ ～ ～ ～ ～ ～

とらせ ～ ～ ～ ～ ～ ～

行かせ ～ ～ ～ ～ ～ ～

知らせ ～ ～ ～ ～ ～ ～

持たせ ～ ～ ～ ～ ～ ～

(語
末
良)
語尾あ列す (語
末
良)
語尾あ列し (語
末
良)
語尾あ列そ;

あ列したは、語尾あ列符字を書き、した 省略 の方法で表現します。

す じて も

行か ～ ～ ～

知ら ～ ～ ～

聞か ～ ～ ～

語尾あ列しその変化

(語
末
良)
語尾あ列しそた
語尾あ列しそて
語尾あ列しそる

(語
末
良)
語尾あ列しそよ;
語尾あ列しそぬ;

語尾あ列
しそねば

→ 語尾あ列しそむ → 語尾あ列さしむる

	た	て	る	れば	ねば	よ
知らしめ	と	ハ	ル	ル	ハ	ヒ
言わしめ	ヘ	ハ	ル	ル	ハ	ヒ
きたさしめ	テ	フ	ル	ル	ハ	ヒ
なさしめ	レ	ル	ル	ル	ハ	ヒ

語尾え列しめ の変化

語尾え列しめた
語尾え列しめて
語尾え列しめる

(語尾) も 語尾え列しめよう
語尾え列しめれば

語尾え列
しめれば

	た	て	る	れば	ねば	よ
集めしめ	リ	ハ	リ	リ	ハ	リ
遂げしめ	ヘ	ハ	ル	ヘ	ハ	ヒ
見せしめ	ヘ	ハ	ル	ヘ	ハ	ヒ

語尾え列しむ は ハ 語尾え列しむる は ハ と書きます。

否定

相ならない の変化

にならない、となりない の変化は、に、と を書いて ならない

の変化を書きます。

に相なる〇 と相なる〇 に相なつた〇 と相なつた〇 に相なつて〇
と相なつて〇 に相なろ〇 ヒ相なろ〇 に相なれば〇 と相なれ

ばへ の否定型は 。。を添えて表現します。

	なかった	ない	す	なければ
に相なら	○	○	○	○
と相なら	○	○	○	○

重力詞語尾 ありない の変化

A B = た通りの書き方をします。Aは語尾符字によつて、Bは語根符字によつて表現します。

A	語尾ありなかつた	語尾ありす
	語尾ありない	
	語尾ありなかろ	語尾ありなけれは
B	語尾ありなけれはならぬ	語尾ありなけれはならぬ
	語尾ありすんば	語尾ありなけれは（これで もよろしい）
	語尾ありなく	
	なかろ	なかつた
	ない	なく
	す	なければ
	なければ	ならぬ
貸さ	一	一
超さ	一	一
行か	ノ	ノ
知ら	ノ	ノ
出さ	ノ	ノ
済ま	ノ	ノ
思わ	ノ	ノ

B 語根の符字によるもの

	なかろ	なかつた	ない	なく	す	なければ	なければ	ならぬ
なさ	○	○	○	○	○	○	○	○
開か	○	○	○	○	○	○	○	○
置か	○	○	○	○	○	○	○	○
貸す	○	○	○	○	○	○	○	○
取ら	○	○	○	○	○	○	○	○

動詞語尾えりないの変化

これも A B 二通りの書き方をします。A は語尾符字によって、B は語根符字によって表現します。

A	語尾	えりなかつた	語尾えりはず					
	語尾	えりない	語尾えりなれば					
	語尾	えりなかろ	"					
B	語尾	えりなければならぬ	語尾えりなければならぬ					
	語根							
	なかろ	なかつた	ない	なく	す	なければ	なければ	ならぬ
決め	一	一	一	一	一	一	一	一
述べ	一	一	ン	メ	メ	メ	メ	メ
渡え	一	一	一	一	一	一	一	一
擧げ	ハ	ハ	ク	ク	ク	ク	ク	ク
遂げ	ハ	ハ	×	×	ン	×	×	×
退室	一	一	メ	メ	フ	メ	メ	メ

B	なかろ <small>う</small>	なかつ <small>た</small>	ない	なく	す	なければ	なければ な <small>ら</small> せば	なければ な <small>ら</small> ない
決 <small>め</small>	○	○	○	○	○	○	○	○
述 <small>べ</small>	○	○	○	○	○	○	○	○
変 <small>え</small>	○	○	○	○	○	○	○	○
挙 <small>げ</small>	○	○	○	○	○	○	○	○
遅 <small>け</small>	○	○	○	○	○	○	○	○
))))))))

語尾ありされない の変化

一 語尾ありれなかつた
 二 語尾ありれない
 三 語尾ありれなく
 四 語尾ありれなかろう

一 言語尾ありれなかつた
 二 言語尾ありれない
 三 言語尾ありれなく
 四 言語尾ありれなかろう

一 言語尾ありれなかつた
 二 言語尾ありれなれい
 三 言語尾ありれなれく
 四 言語尾ありれなれかろう

一 言語尾ありれなれい
 二 言語尾ありれなれく
 三 言語尾ありれなれかろう

これも A B = たとおりの書き方があるが、Aだけにします。

	なかろ <small>う</small>	なかつ <small>た</small>	ない	なく	す	なければ	なければ な <small>ら</small> せば	なければ な <small>ら</small> ない
知 <small>られ</small>	上	下	+	+	+	ナ	ナ	ナ
頼 <small>まれ</small>	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
申 <small>され</small>	一	二	三	四	五	六	七	八
もたら <small>され</small>	?	?	?	?	?	?	?	?
争 <small>かれ</small>	上	下	+	+	+	ナ	ナ	ナ
憎 <small>まれ</small>	上	下	+	+	+	ナ	ナ	ナ
行 <small>なわれ</small>	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ

語尾え列られないと の変化。

語尾え列られなかつた
語尾え列られないと
語尾え列られなかろ;

(語
根)

語尾え列られす
語尾え列られなければ

ならぬ、ならないとの運筆は前の例によります。以下お手じです。

	なかろ;	なかつたない	なくす	なければ	なければならぬ	なければならぬない
挙げられ	ノ	ノ	メ	ヌ	シ	シ
考えられ	フ	フ	ト	フ	ナ	ナ
始められ	フ	フ	タ	フ	タ	タ
苦しみられ	コ	コ	カ	コ	シ	シ

語尾あ列せないと の変化。

語尾あ列せなかつた
語尾あ列せないと
語尾あ列せなかろ;

(語
根) 語尾あ列せす
語尾あ列せなく
語尾あ列せなければ

	なかろ;	なかつたない	なくす	なければ	なければならぬ	なければならぬない
行かせ	フ	フ	リ	フ	シ	シ
見させ	フ	フ	ナ	フ	カ	カ
知らせ	フ	フ	タ	フ	ミ	ミ
考えさせ	フ	フ	ト	フ	ナ	ナ

語尾あ列さないと の変化

語尾あ列さなかつた
語尾あ列さないと
語尾あ列さなかろ;

(語
根)

語尾あ列さす
語尾あ列さなく
語尾あ列さなければ

車かう;	車かつた	ない	なく	す"	车ければ	なければ	なければ
歩かさ	く	く	く	く	く	ならぬ	ならぬ
知らさ	く	く	く	く	く	も	も
聞かさ	く	く	く	く	く	も	も

語尾ありしめないの変化

語
根

語尾ありしめなかつた
語尾ありしめない
語尾ありしめなかう;

語
根

語尾ありしめす
語尾ありしめ车く
語尾ありしめなければ

車かう;	車かつた	ない	なく	す"	车ければ	なければ	なければ
知らしめ	く	く	ナ	ク	く	く	く

語 根							
語 根							

語尾えりしめないの変化

車かう;	車かつた	ない	なく	す"	车ければ	なければ	なければ
逃げしめ	く	く	く	く	く	く	く
逃げしめ	く	く	七	く	く	く	く
挙げしめ	く	く	也	く	く	く	く
見せしめ	く	く	大	く	く	く	く

これの基本とあっていい等字と位置は

語尾えりしめなかつた
語尾えりしめない
語尾えりしめなかう;

語
根

語尾えりしめす
語尾えりしめ车く
語尾えりしめ车けれ

動詞語尾さない、らない等の記録の区別

21 夏用言について述べましたように、動詞には語尾がら行とさ行といふように二つに分かれます。これの打消しは、書きみやすくするために、さ行ないの変化は語根符字のまん中に、ら行ないの変化は語根符字のまん中より右よりに語尾変化の符字を書いて区別をつけます。語根符字を位置によって書き記すときは、語根符字を前符字のま上、ま下へ書いてさ行とし、やや右よりに上下へ書いてら行とします。

例)

	さない	さなかつた	さなかろ;	らない	らなかつた	らなかろ;
起	ナ	ノ	ト	ナ	ノ	ト
余	ナ	ノ	ト	ラ	ノ	ト
下	タ	ノ	ト	タ	ノ	ト
移	タ	ノ	ト	タ	ノ	ト
	せない	せなかつた	せなかろ;	れない	れなかつた	れなかろ;
起	ヘ	シ	ト	ヘ	シ	ト
寄	タ	シ	ト	タ	シ	ト
流	タ	シ	ト	タ	シ	ト
戾	タ	シ	ト	タ	シ	ト
逐	タ	シ	ト	タ	シ	ト

す、なけれは、なければならぬ等の変化は、前の例によります。
54

鄭重語

鄭重語あります、ございます、思います、在ります、参ります等、ますの変化のつく言葉は、記録語としての頻出度は非常に高いものであります。この頻出度の高い言葉に対して、その記録量を、より僅少化して、実質語である名詞の線量の大を補完し、高い速度の音声言語にスムーズに対応させよう設けてある方法であります。本方式においてはこれを A B C D 四つの範疇に分け、同時に肯定否定も含めて取り扱っていきます。

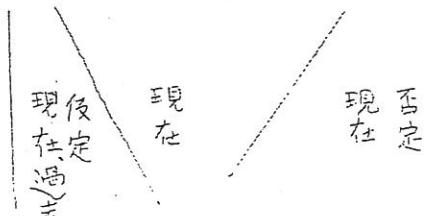
A は書記位置を決めて表現します。

	過去、否定の位置
前字	
	現在、未来、仮定

B は A の書記位置とは関係なく、横の長大線の引き方によって表現します。



C は A の書記位置とは関係なく、斜線の長大線の引き方によって表現します。



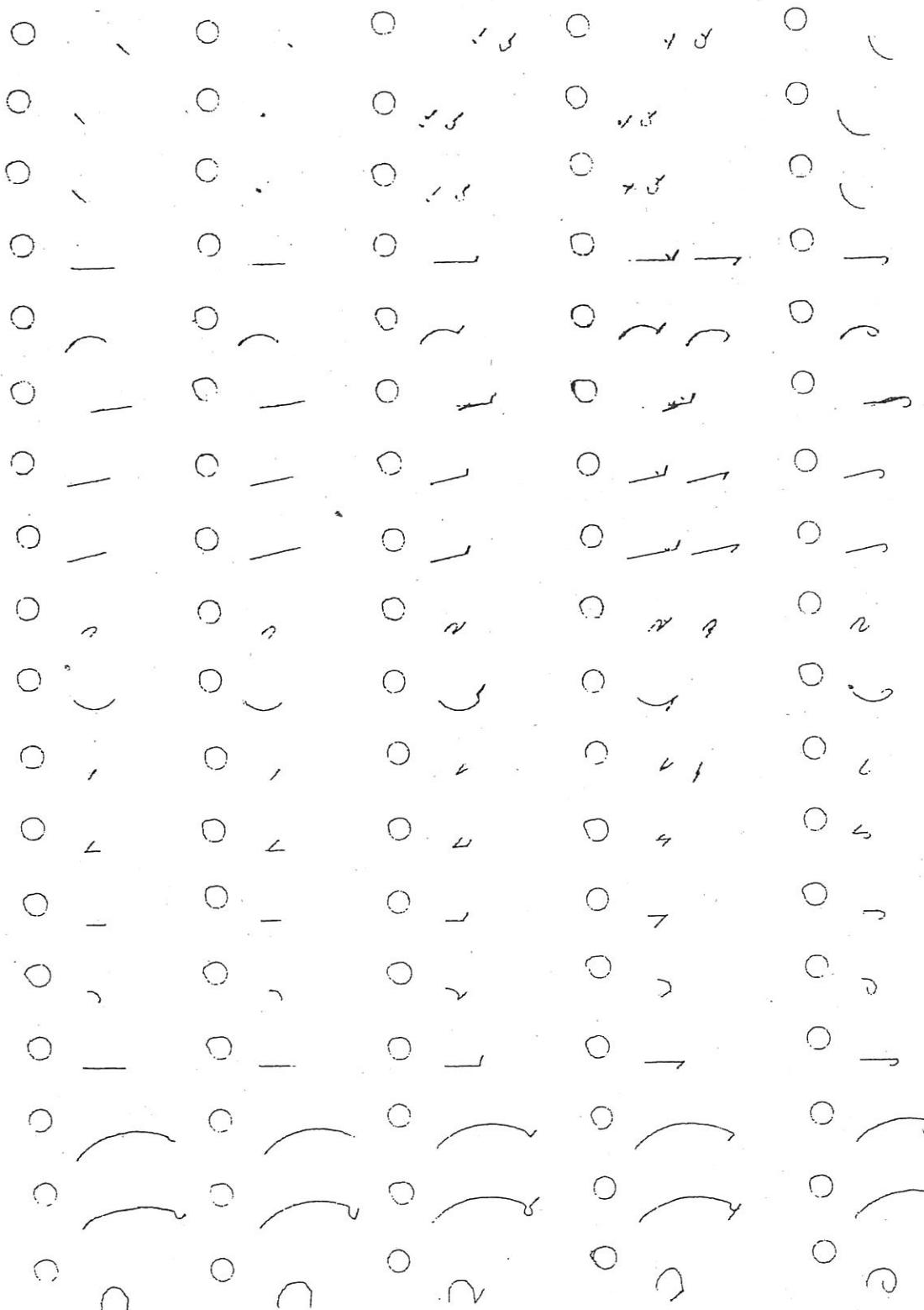
D は A の書記位置を使用するので、語尾えります、語尾あれます、あれせます等々の変化のものの表現方法であります。

A

ましょ、ません ませず ました

あり	○	○	○	○	○
であり	○	○	○	○	○
るであり	○	○	○	○	○
があり	○	○	○	○	○
もあり	○	○	○	○	○
ござい	○	○	○	○	○
ござざい	○	○	○	○	○
のでござい	○	○	○	○	○
おり	○	○	○	○	○
たり	○	○	○	○	○
思い、と思ひ	○	○	○	○	○
思われ、と思われ	○	○	○	○	○
され	○	○	○	○	○
せられ	○	○	○	○	○
考え方	○	○	○	○	○
申し	○	○	○	○	○
申し上げ	○	○	○	○	○
参り	○	○	○	○	○

まして ます まあと ますると ますれば



ましょ ません ませず ました

し ○ ○ ○ ○
存じ ○ ○ ○ ○
に相なり ○ ○ ○ ○
と相なり ○ ○ ○ ○

应用として

わけであり ○ ○ ○ ○
ことであり ○ ○ ○ ○
ものであり ○ ○ ○ ○
はずであり ○ ○ ○ ○
ではあり ○ ○ ○ ○
でもあり ○ ○ ○ ○
ところであり ○ ○ ○ ○

次第であり

と思ひうであり
考えであり ○ ○ ○ ○
になつており Q Q Q Q
になつてい Q Q Q Q
いたされ } C ○ ○ ○

まして ます ますと ますると ますれば

○ , ○ , ○ , ○ , ○ ,
○) ○) ○) ○) ○)
○ 、 ○ 。 ○ 、 ○ 、 ○ 、
○ 、 ○ 。 ○ 、 ○ 、 ○ 、

○ < ○ < ○ < ○ < ○ <
○ - ○ - ○ - ○ - ○ -
○ - ○ - ○ - ○ - ○ -
○) ○) ○) ○) ○)

○ , ○ , ○ , ○ , ○ ,
○) ○) ○) ○) ○)
○ 。 ○ 。 ○ 。 ○ 。 ○ 。
○ - ○ - ○ - ○ - ○ -
○ - ○ - ○ - ○ - ○ -
Q , Q , Q , Q , Q ,
Qn Qn Qn Qn Qn
○ - ○ - ○ - ○ - ○ -

B.

ましょ ません ませす ました
ますと

あつたのであり ○

あつたであり ○

であつたのであり

であつたであり ○

であるうであり

であるであり ○

であろうと思ふのであり

であろうと思ふであり

したのであり ○

したであり ○

になつたのであり ○

になつたであり ○

にならうであり ○

にならであり ○

に相なつたのであり ○

に相なつたであり ○

に相なるであり ○

に相在るであり ○

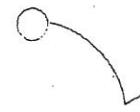
補

まして

ます

ますれば

になろうと思うので
あります



に相なろうと思
るのであります



と相なろうと思
のであります



のでござります



は／が／

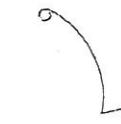


になつたけであり
ます。



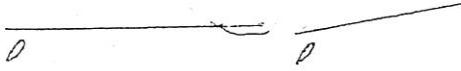
131)

に相なろうと思
のでござります



ましょ； ません ませす

と相なつたのであり



と相なつたであり



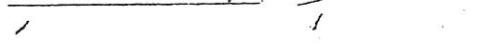
と相なるのであり



と相なるであり



あつたのであり



してあつたのであり



あつたであり



してあつたであり



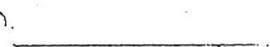
あるのであり



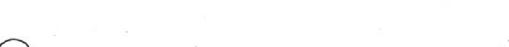
してあるのであり



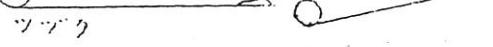
あるであります



してあるであります



いるのであり



しているのであり



いるであります



となつたのであり



となつたであります



となつてあるのであります



となつてあるであります



となつているのであります



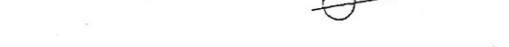
となつているであります



よいであります



ないであります



62

ました まして ます ますれば 本音
ますと

ないで
ありま
しよ;

存いの
てあり
ます

の、末
端の。

一 二 の

ナリニ
下側に
書いて
表現し
ます。

ましょ ません ます

思つたのであり
と思つたのであり

思つてあるのであり
と思つてあるのであり

思われたのであり
と思われたのであり

思われるのであり
と思われるのであり

にしてあるのであり

にしているのであり

としてあるのであり

してしているのであり

思つているのであり
と思つているのであり

いたしたのであり

いたしてあるのであり

いたしているのであり

いたしたいのであり

(と)考えてあるのであり

(と)考えているのであり

補 てあります 一 は、前例に従つて フタを下側に書いて表現します。

ました まして ます ますれば
ますと

／＼＼＼

＼＼＼＼

○○○○

○○○○

＼＼＼＼

＼＼＼＼

＼＼＼＼

＼＼＼＼

○○○○

○○○○

○○○○

○○○○

○○○○

でありますると は ／ または ／

ましよう

ません

ませす

C
Cの1

したのでござい



になつたのでござい



になるのでござい



に相なつたのでござい



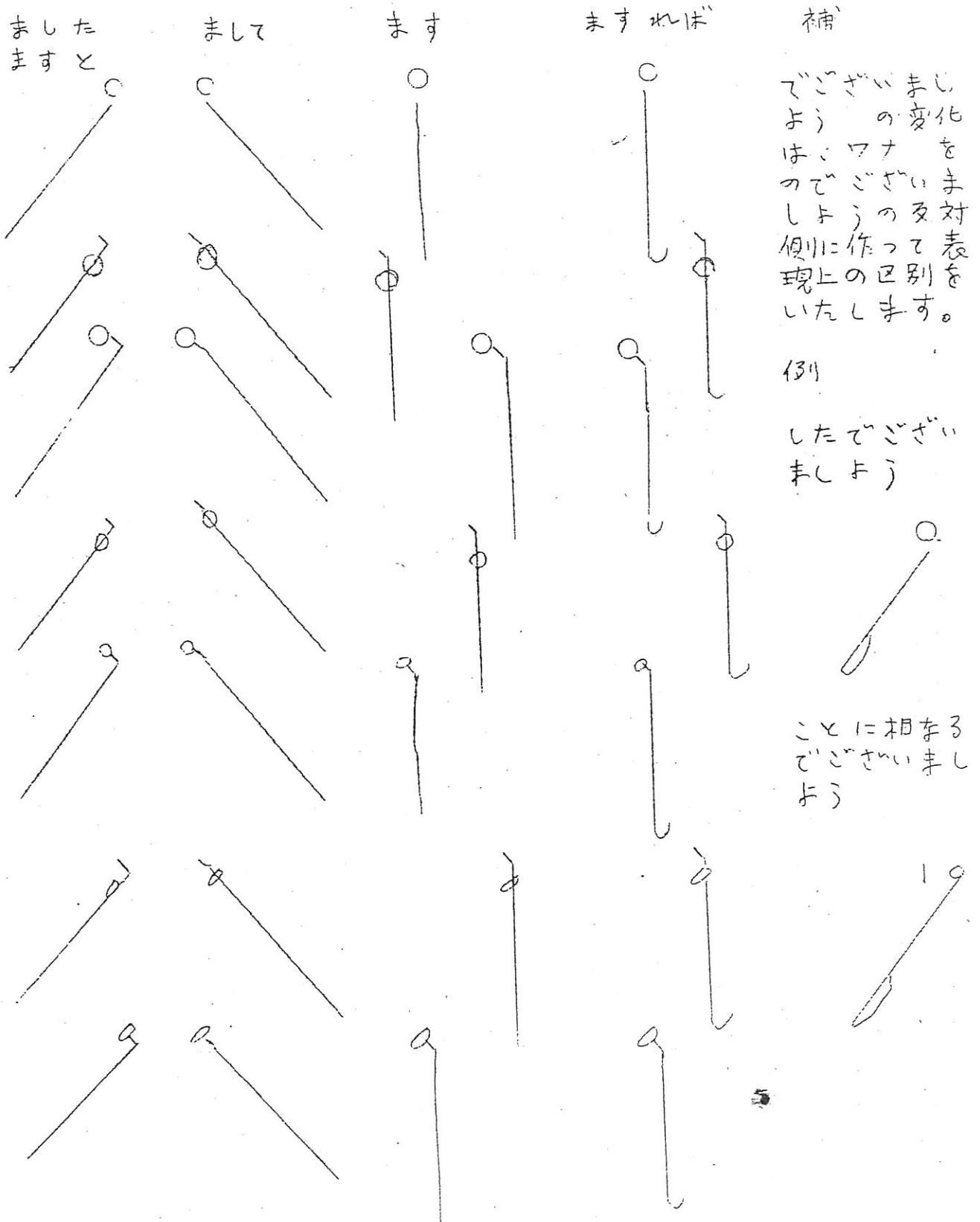
に相なるのでござい



と相なつたのでござい



と相なるのでござい



ましょ



ません



ませす



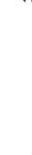
あるのでござい
してあるのでござい



となってあるのでござい



となっているのでござい



ようでござい
ないでござい

思つてあるのでござい
と思ってあるのでござい



思つているのでござい
と思つているのでござい

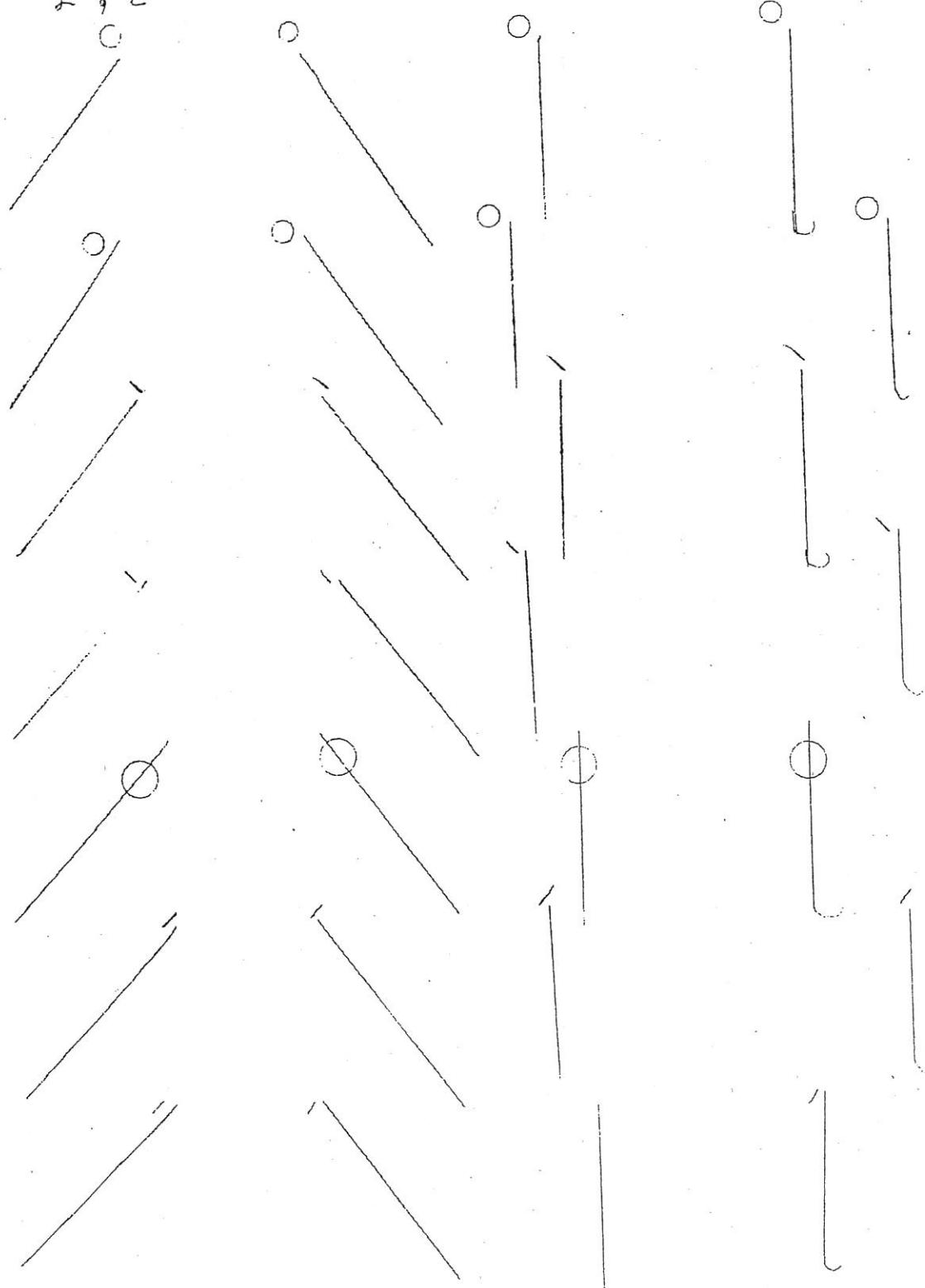


ましたと
まます

まして

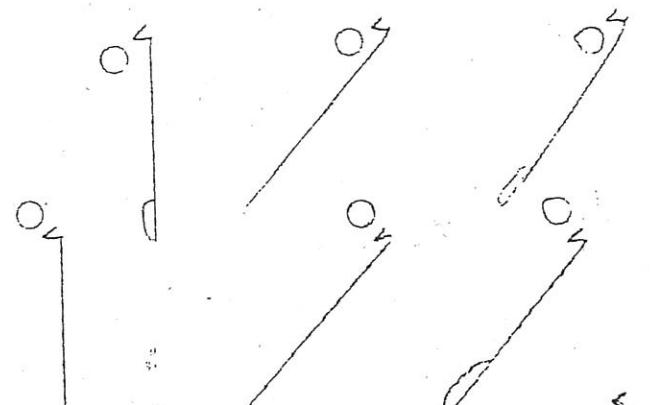
ます

ますれば

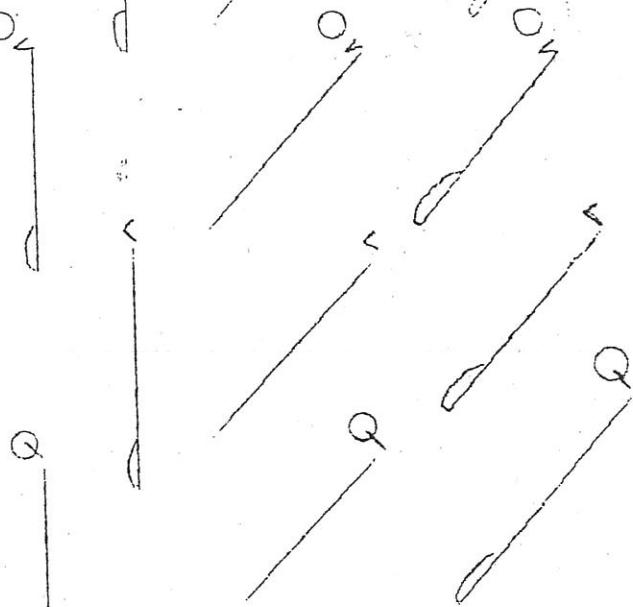


ましよう ません ませす

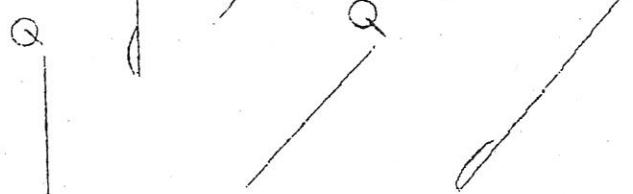
思われたのでござい
と思われたのでござい



思われるのでござい
と思われるのでござい

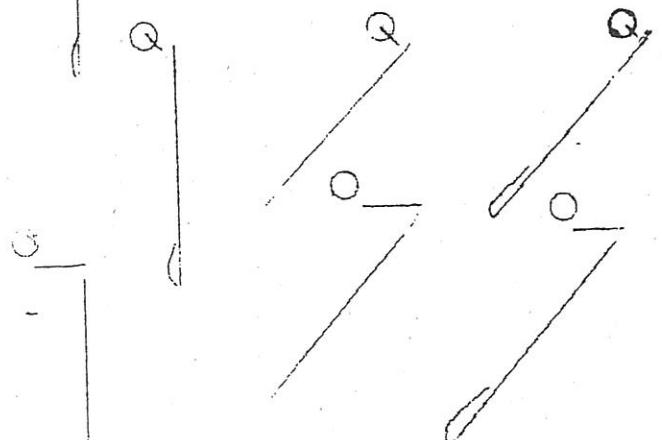


思われてあるのでござい
と思われてあるのでござい

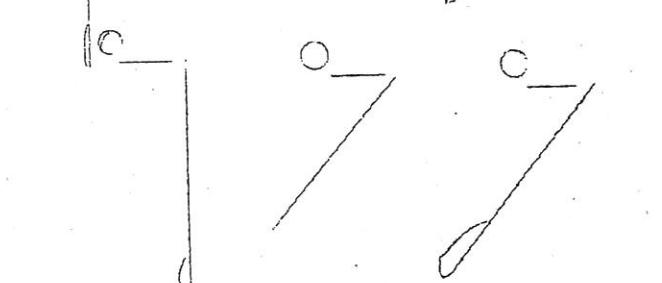


いたしてあるのでござい

いたしているのでござい



考えてあるのでござい



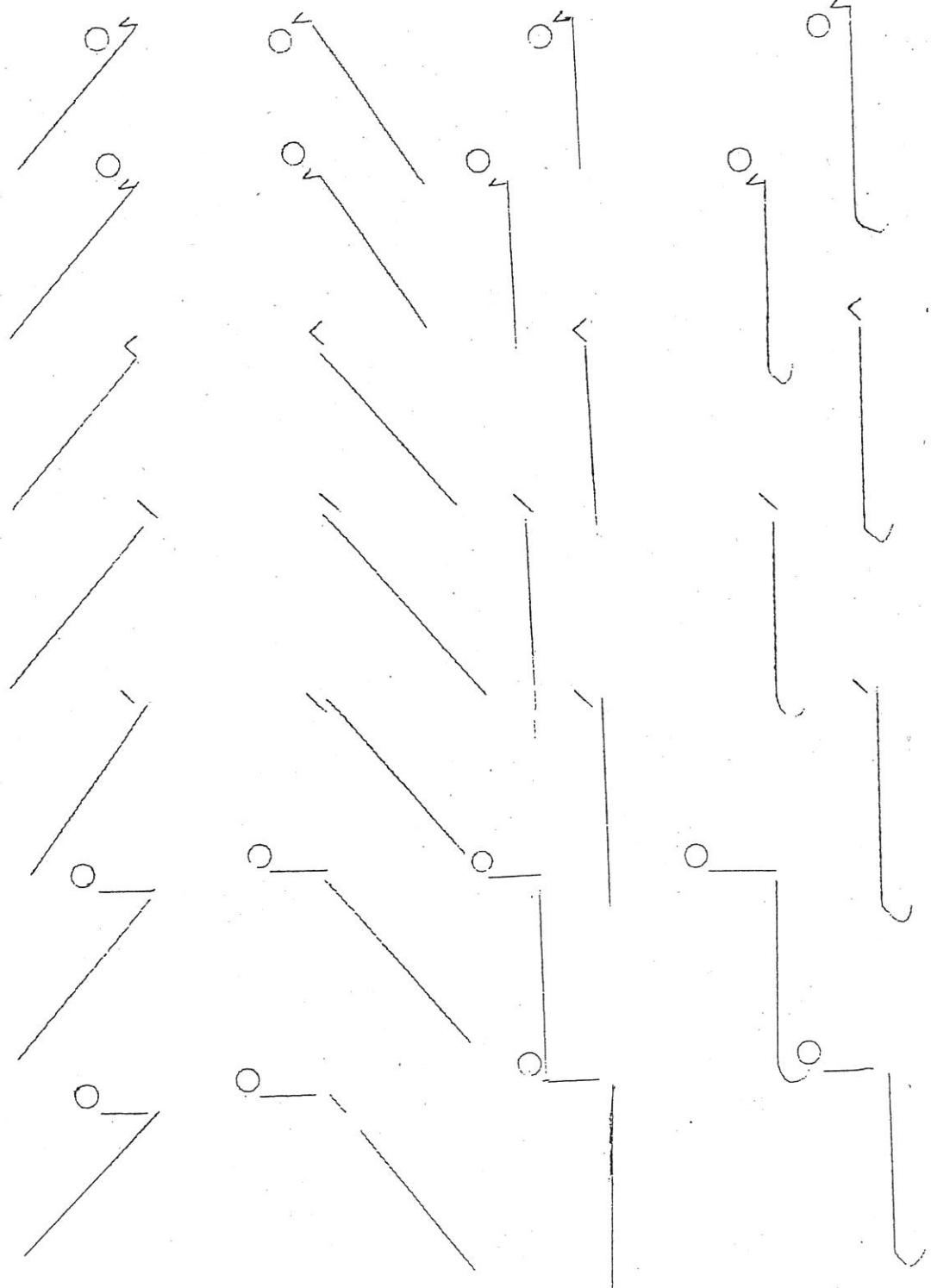
考えているのでござい

ました
ますと

まして

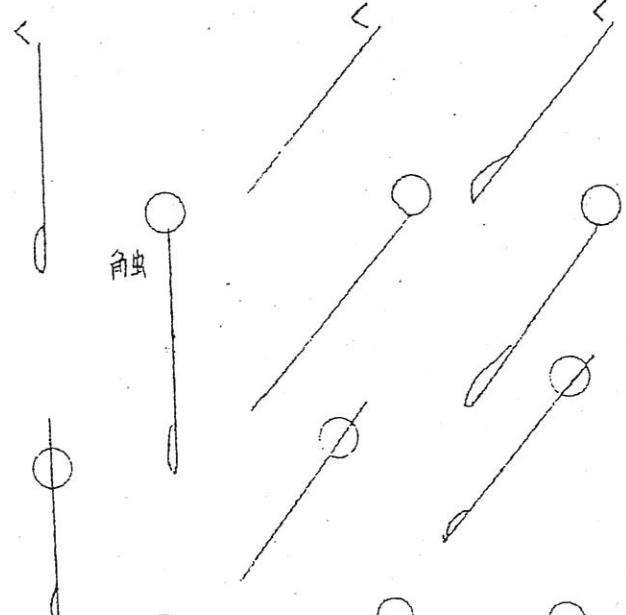
ます

ますれば



ましょ
ません
ませす

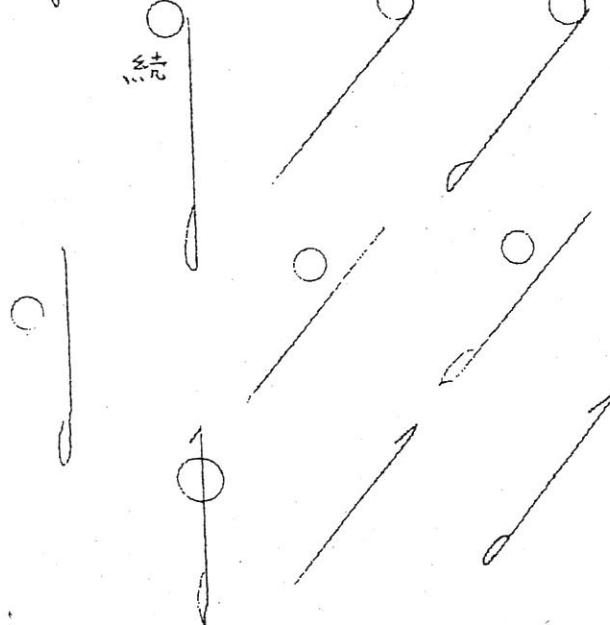
思われて いる ので
と思われて いる のでござい



いたし
といいたし

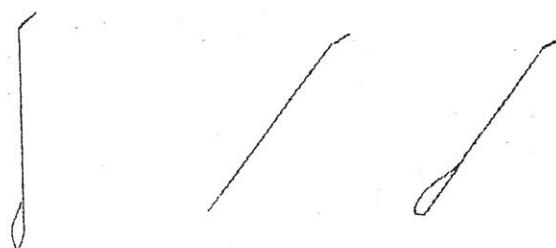
おり

となり



と思ひ
(前が ツタのとき、ツタの位置へ)

思つて おり
と思つて おり

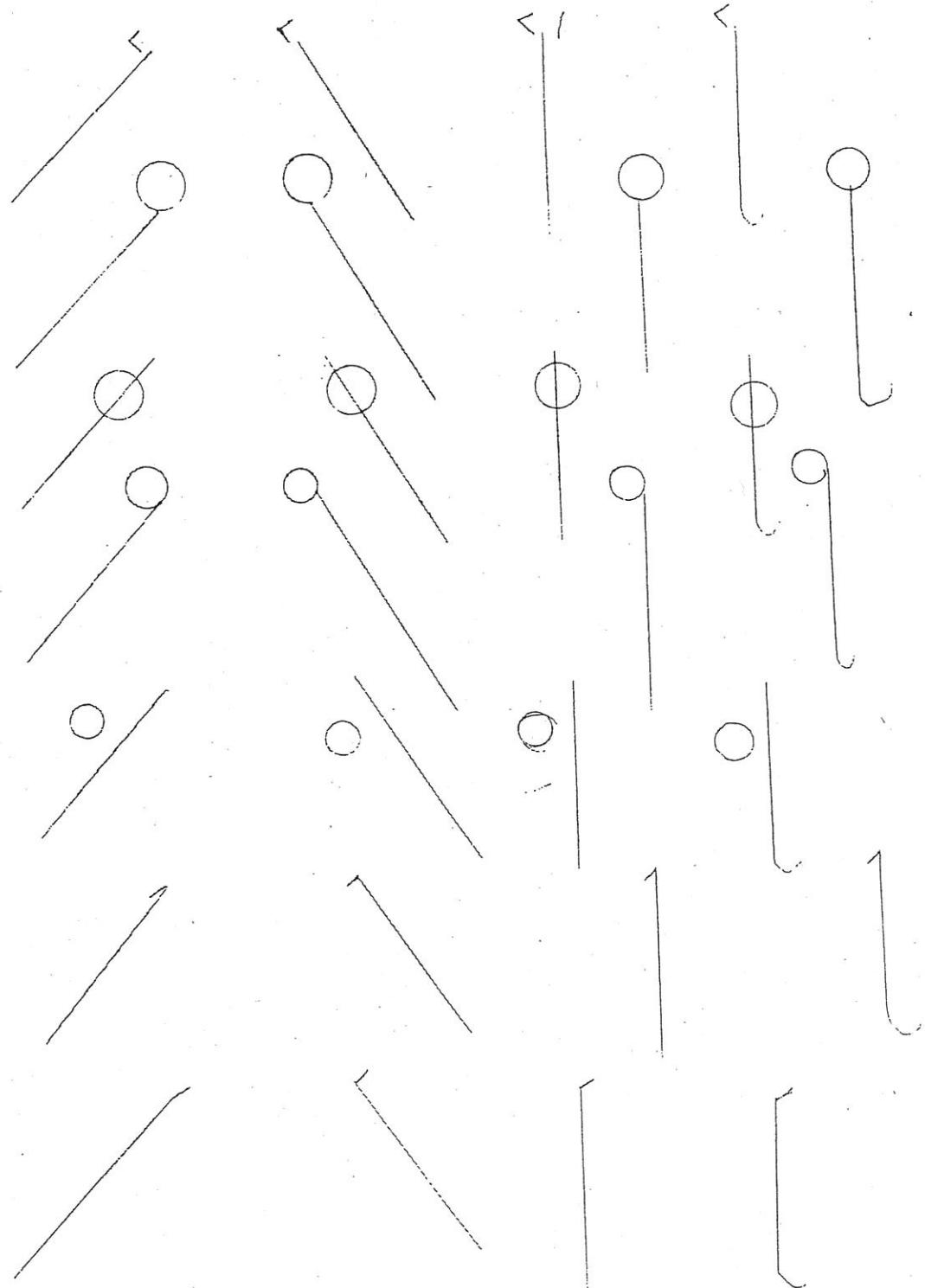


ました
ますと

まして

ます

ますれば



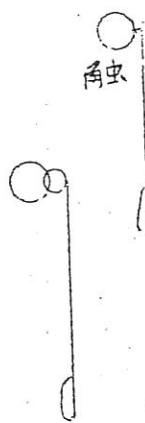
ましよう

ません

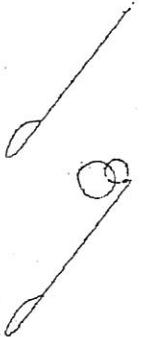
ませす

になつており

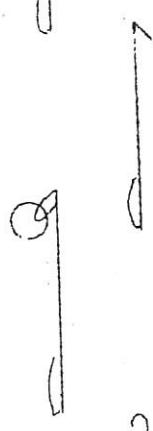
触



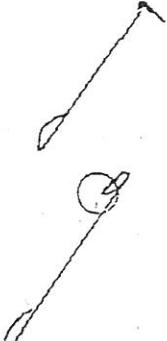
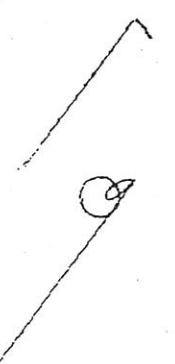
に相なつており



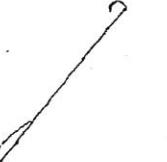
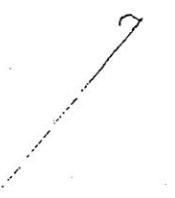
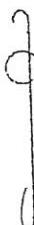
となつており



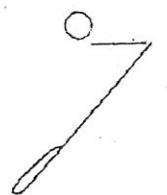
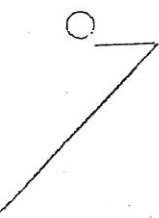
と相なつており



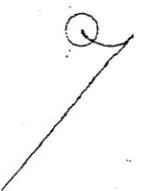
次中でござい
(前がツタのとキ、ツタの位置へ)

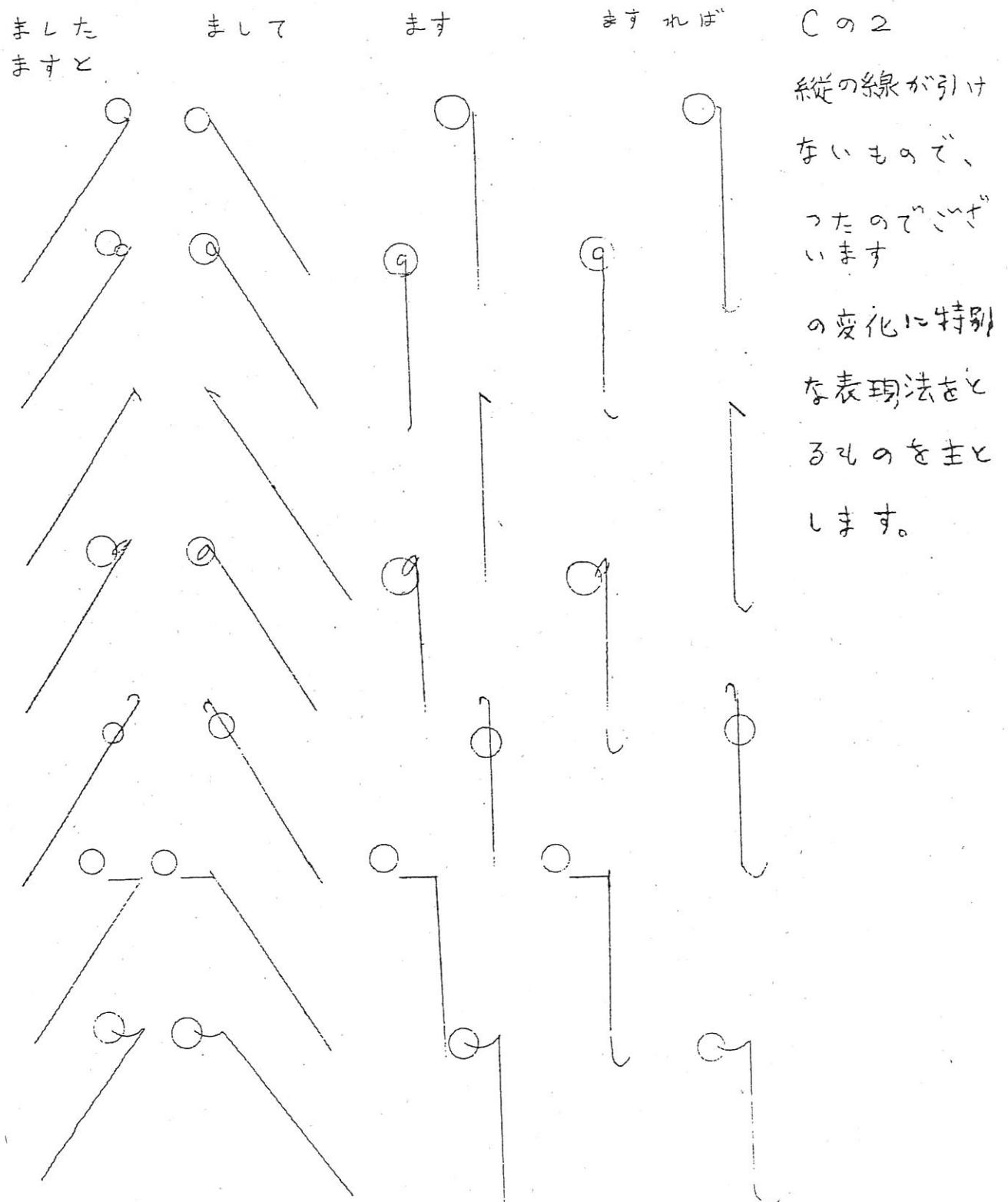


考えており



なつており





Cの2

	ましょ <small>う</small>	ません	ませず <small>づ</small>	ました <small>ましと</small>
あつたのでござい	○ ↗	○ —	○ ↗	○
と在つたのでござい	— ↗	— —	— ↗	— —
となるござい	↗ ↗	↗ —	↗ ↗	↗ —
つたよいでござい	↙ ↗	↙ —	↙ ↗	↙ —
いたしたのでござい	↙ ↗	↙ —	↙ ↗	↙ —
いたいたいのでござい	○ ↘	○ —	○ —	○ —
思つたのでござい と思つたのでござい	↖ ↗	— —	— —	— —
おつたのでござい	— ↗	— —	— —	— —
なつたのでござい	— ↗	— —	— —	— —
とつたのでござい	— ↗	— —	— —	— —

D

例

述べ

○ ↗	○ —	○ ↗	○ ↗	○ —
○ —	○ —	○ —	○ —	○ —
○ ↗	— —	— —	— —	— —
○ ↗	— —	— —	— —	— —
○ ↗	— —	— —	— —	— —

見られ

あがられ

知らられ

ならられ

連れれしめ

ママ

まし	ます	ますれば	略字
○ —	〇 —	〇 —	以上のものの応用として、
! —	! —	! —	とするので
) —) —) —	とするもので
○ —	○ —	○ —	を省略して、あります、ござい
ダ	ダ	ダ	ますにつながるもの書き方、
中	中	中	存するのであります)
△	△	△	信するのであります)
フ	フ	フ	感するのであります)
(((存するのでございます)
—	—	—	信するのでございます)
感	感	感	感するのでございます)
存	存	存	存するものであります)
せん	せん	せん	せんとするものであります)
○)	○)	○)	存するものでございます)
○ ~	○ ~	○ ~	せんとするものでございます)
○ う	○ う	○ う	以上の語の末が まして やな
○ く	○ く	○ く	るものは 、 - 一 とそ
○ く	○ く	○ く	の変化を表現します。

助 詞

助詞を分類しますと、体言に附属するものと用言に附属するものと諸語に附属するものとにあります。

書かれた助詞が正確であるかどうか、論旨をよく捕捉しているかどうかといふことは、その速記に信憑性があるかどうかに關係してくることになりますので、速記方式においての助詞の取り扱いといふものは慎重でなければなりません。

私の調べたある日ある時の国会の委員会においての発言では、助詞の頻出度といふものは大体11%前後のものでありました。しかし頻出度の高いものはすべて一音の助詞でありました。これは調べた材料が遠いますと頻出度もおのずから遠つてくるものなので、助詞の頻出度はこうだといふことを一がいに言えないのでもちろんのことです。

助詞は田各字の形をとります。

そ 、 を 、 か 、 ー が ○ 、 ー かに ー
から 、 かど ; かー か否か — か否や ー 、 くら い ○
くら い ○ けれども > けれど ~ こそ ○ このま ま । ॥
のま ま バ このま まに । ॥ のま まに バ タル ○ されつ つ =
レ 、 ○ しつ つ ○ しながら ← そらくら い 、 そくら い 、 そくら い 、

そのまま そのままに まだ / だけ | だが ↗ /
つつ 〇 で \ では し てし てし と へ
とか / との タ とル ロ とはのは イ として へ〇
といえども ↗ といえど" ↗ どのくらい ↗ どのくらい ↗ どの程度 ↗
ま ながら なに なのか なは ↗
なのは なので なのに なには なに なに なに
なのだ なるに なるには なるにも ない こ
には エトに いか た いのみ さ いし イ わ 一
の / のか 一 のが 一 ので 一 のと 一
のみ る のを タ のも ↗ のだ" つ のでは と
のなら ひ のならばへ のに さ のには ん ので も ↗
のとは ん なに なに のとが ばかり ↗ おが 〇
方で 〇 方の 〇" 方では 〇" まで 〇 も 一
や く や否や ↗ や否か く るが 〇 るが 〇.
るので Q るが 〇 ならば なれば つ より 〇.〇

形容詞及び形容動詞

音声言語、ことに記録語における形容詞の頻出度はきわめて低いものであります。

久活用を音韻的に分解してみると、活用部の い き く し の前の音は、母列、ɔ列、o列、ø列が大部分を占めていて、e列のものはきわめて少く、i列のはいのは大きいぐらいのように思われます。

形容詞には三つの音便がありますが、詰音便是現在牛民衆の会話語であって、記録語には存在しておりません。い音便是一部記録語となりかけているようありますし、い音便是文語の終止形 し か い になつたしと、文語連体形 き か い になつたものとあります。両方とも現在記録語として普遍的に用いられております。

形容詞の頻出度はいま述べましたように頻出度は意外ほど低いのであります。他品詞の速度性と均衡がとれたように構成をいたしました。

志久活用は活用部の前は え い う エ お 全部の行に及んでおりますが、これも他品詞の速度性と均衡のとれたように構成をいたしました。久活用と志久活用の書き方の区別は、久活用は続けて書くのに對して、志久活用は、語幹と活用部を寄せて書いて区別します。

久活用

活用部一音前の音			活用部 及び 符字					
			い	き、く	そ	かつた	かうじ	ければ
た	さ	かあ	-	-	-	○	-	→
な	す	くう	।	।	△	○	△	し
は	こ	お	／	／	△	○	△	ぐ
ま	こ	え	＼	＼	△	○	△	＼
や	と	け						
ら	む	せ						
	の	て						
	ほ	ね						
	シ	ね						
	よ	へ						
	る	め						
		れ						

説明

い は 符字 の 末 端 を 流 す。
 き、く は 符字 の 末 端 を と め る。
 そ は 符字 の 上 側 に あ る か わ る。
 ろ う は 符字 の 下 側 に あ る か わ る。
 かつた は き、く の 符字 を 上 部 に 接 触、
 ければ” は 符字 の 末 端 を 流 し た か き”。

例り

い き、く そ； かつた かうじ ければ

赤、甘、淡:

一 一 一 一 一 一 一

ま

レ レ レ レ レ レ レ

元

一 一 一 一 一 一 一

幼

フ フ フ フ フ フ フ

から

— — — — — — —

早

フ フ フ フ フ フ フ

暗、奥

— — — — — — —

こまか

一 一 一 一 一 一 一

近

フ フ フ フ フ フ フ

ら

レ レ レ レ レ レ レ

ハ キク ヲ カツタ カロリ ハルハ

暑、厚

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

法

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

輕

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

きつ

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

こす

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

寒

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

する

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

だる

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

いへ

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

ひる

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

低

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

古

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

まる

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

さやけ

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

安らけ

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

青

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

くど

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

すこ

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

しつこ

ハ ハ ヲ ハ ハ ハ

82

い きく そ かつた からう ければ

強	」	」	」	」	」	」
遠	「	「	」	」	」	」
ひど	夕	夕	夕	夕	夕	夕
広	夕	「	夕	夕	夕	夕
細	{	{	{	{	{	{
もろ	フ	フ	フ	フ	フ	フ
大	△	△	△	△	△	△

否定の符号の用意はあります、頻度の少ないものですから、変化の、
くまで書き、ないの変化符号を書いて表現します。

志久活用

活用部一部		活用部 及び 符号					
前り音	し い	しき	しく	しゅう	しかうう	しかつた	しければ
た さ が あ	○ -	○ -	○ -	○ -	○ -	○	○ つ
な ち し き い	○ ·	○ ·	○ ·	○ ·	○ ·	○ · つ	○ · つ
は に す く ；	○ ।	○ ।	○ ।	○ ॥	○ ।	○ ।	○ い
ま ひ け え	○ 、	○ 、	○ 、	○ 、	○ 、	○ 、	○ 、
や め せ お	○ /	○ /	○ /	○ /	○ /	○ /	○ /
ら り て こ							
わ も ね そ							
ゆ へ と							
る め の							
れ ほ よ							
	3						

説明

い列しき、しくの変化のほかは短い符号をそれぞれ離して書きます。
 しかつたの書記位置は、であつたの書記位置よりやや右側。
 しきの書記位置は、活用の前の符号より高く書かないこと。
 点は打点位置が空しいので、いしきは一、
 いしくは一で前符号を敷く寓意法によつて表現します。惜しいにも使用する。83

例	い	しき	しく	しゆう	しかる	しかつた	しかれば
新	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-
漬け	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-
怪	υ-	υ-	υ-	υ-	υ-	υ-	υ-
荒々	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-
いかがわ	η-	η-	η-	η-	η-	η-	η-
勇ま	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-
おか	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-
詳	η-	η-	η-	η-	η-	η-	η-
陰	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-
騒が	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-
まさま	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-
せわ	ο-	ο-	ο-	ο-	ο-	ο-	ο-
正	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-
近	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-
親	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-	ι-
ぬま	υ-	υ-	υ-	υ-	υ-	υ-	υ-
昔々	η-	η-	η-	η-	η-	η-	η-
みまたま	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-	γ-
豊ま	ο-	ο-	ο-	ο-	ο-	ο-	ο-

	い	き	く	う	か	か	た	け	れ	ば
や昔し	い	き	く	う	か	か	た	け	れ	ば
さびし	さ	び	し	さ	び	し	さ	び	し	さ
きびし	き	び	し	き	び	し	き	び	し	き
美し	み	い	う	い	う	い	う	い	う	い
すうすうし	す	う	す	う	す	う	す	う	す	う
苦し	し	く	し	く	し	く	し	く	し	く
涼し	り	う	り	う	り	う	り	う	り	う
激し	い	き	い	き	い	き	い	き	い	き
いかめし	い	か	め	し	い	か	め	し	い	か
なれなれし	な	れ	な	れ	な	れ	な	れ	な	れ
恐ろし	き	ろ	き	ろ	き	ろ	き	ろ	き	ろ
等し	の	う	の	う	の	う	の	う	の	う
よろし	よ	ろ	し	よ	ろ	し	よ	ろ	し	よ
	よ	ろ	し	よ	ろ	し	よ	ろ	し	よ
騒々	さ	わ	さ	わ	さ	わ	さ	わ	さ	わ
ものものし	も	の	も	の	も	の	も	の	も	の
毒々し	ど	く	ど	く	ど	く	ど	く	ど	く
匂い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い

形式形容詞は、ないの一語だけ左のヒ、ないの書き方は形式用言にありますので説明は省略します。

形容動詞

らか な やか な の類が添って形容動詞となり、らかに、やかに
が添って副詞となるのがあります。ここではこれらは便宜上一括
して扱いましょう。

表現の方法は、やか、らかを省略して、な なる い を添え
ますが、R行の音で末端を離筆するものは、離筆の後に、な な
る い を添えて表現します。名詞形には カ を添えるときもある。

例)

	名詞形	な	なる	い	形容詞か ら動詞か 否定へつ づく略字
穏か	✓	＼	＼	＼	／
重やか	—	—	—	—	よくない
あさはか	＼	＼	＼	＼	↗ Ø
きらびやか	＼	＼	＼	＼	よくあり ません
朗か	＼	＼	＼	＼	＼
しつやか	＼	＼	＼	＼	○
ひそやか	＼	＼	＼	＼	よくござ いません
ゆるやか	＼	＼	＼	＼	—
晴れやか	＼	＼	＼	＼	＼
つばさか	＼	＼	＼	＼	よくよい
なごやか	＼+	＼＼	＼＼	＼＼	芷 流

副詞 言詞

副詞は語形変化を持たない実質語ですが、修飾語あります。ために、ときに、有って、よし、無くて、しよしといふものであります。しかし、速記といふのは話者によって音声言語をえられたものでありますから、一根既に等閑にしたり無視することはできません。この方式においては、略記の約束の作られたものはその約束方法によることにし、そうでないものは頻度の高い言葉だけ選んで略字を設けました。

に の添え副詞のうち用略字 (。を添えるもの)

明らかに	○	余りに	～	新たに	△	いずれに	△
徒然に	△	いまだに	△	一斉に	△	お互に	△
簡単には	○	かりに	～	試みに	～	更に	△
幸いに	△	實際に	○	しかるに	△	すぐには	△
他に	△	それに	△	互いに	△	たしかに	△
たちどころに	△	こゝに	△	特に	△	熱心に	△
ほかに、初に	△	ほかに	△	ほじいままで	△	まさに	～
無理に	△	無理やりに	△	派手に	△	容易に	△
楽に	△	ろくに	△	ちなみに	△	何ゆえに	～

応用としての略字

見るに	～	やるよに	△	最初に	△	87
-----	---	------	---	-----	---	----

に の添え副詞

語の末尾の音	に の添えしの	
あかさたなはまやらか	ー	
いきしちにひみり	・	
じくすつぬふむゆる	・	
えけせてねへぬれ	・	
おこそとのほもしろ	・	

を添えます。

前掲のを添える山の略字(うち、この方法で書いても、そ)得失
の差の在りのとここに入れておきました。

例句
 新たに 日 はるかに モ ササカに) さなきだに)
 ただに ノ フカに (ひたすらに ハ つぶさに ハ
 かりに 一 たしかに ノ ひそかに オ 左めらかに 一
 大いに ノ 先に) 頻りに ノ 次に(略字あり) ハ
 遂に ノ 因みに ノ 直ちに / ひと口に ハ ハ
 すぐい ハ 仮すに ノ 加えろに カ 考えろに 一 一
 常で ハ 常に ハ 稀に ハ ひとえに ハ
 まつすぐい ハ みだりに ハ まじめに ハ まつ先に ハ
 可及的速かに、かすかに 一 最終的に ハ ことさらには)
 何ゆえに ハ 何がゆえに ハ

畳語

同じ音韻を持つ語が重率つていう語のこと)で、国音字音の両方にあります。畳音にしなして使います。

書記方法

書記例

1音のものは(国音・字音とし) 同行の書き方 呼々 → きき。

2音のもので国音は ○、前符に並んで点 かねがね ——。

3音以上の国音も2音のものと同じ書き方 かねがね 】。

組成名詞のものも2音のものと同じ書き方 繰り返し繰り返し = 。

字音で撥音のものは前字の右斜上に撥音符字 云々 ○

字音で詰音のものは詰音位置に、詰音となる符字を書き後に来る複音は所定の複字音の位置に書く。(所定の位置後出) 切々たる ○

2音目いきくつのかく字音も所定の複字音書記位置に書き、置語となす後の字音をその字音の所定の位置に書きます。

長音のものは(国音・字音とし) 同行の書き方をします。

例 同行の書き方をするもの

峨々	一	疑義	一	区々	一	空々	——
輕々	一	取々	→	囂々	→	些々)
四肢	四	時事	二	收拾	二	清々	四
錚々	錚	父	父	亭々	亭	滔々	錚
堂々	堂	母	母	比々	比	微々	堂
平々	平	銘々	銘	猛々	猛	悠々	平
洋々	洋	寥々	寥	朗々	朗	汲々	洋
意竟々	意竟	重々	重				意竟

例 ニ音以上の国音

かねがね — 重ね重ね しろいろ くろくろ
 いわり いわり いわじわ ほつりほつり
 がたがた ナボリガリ 取りどり がらがら

例 擬音(字音)のルの

暗々	○	殷々	○	云々	○	炎々	○
侃々	○	近々	○	拳々	○	滾々	○
熾々	○	深々	○	門々	○	孫々	○
坦々	○	段々	○	沈々	○	転々	○
垂々	○	年々	○	半々	○	頻々	○
紛々	○	片々	○	漫々	○	面々	○
悶々	○	火爆々	○	凜々	○	恋々	○

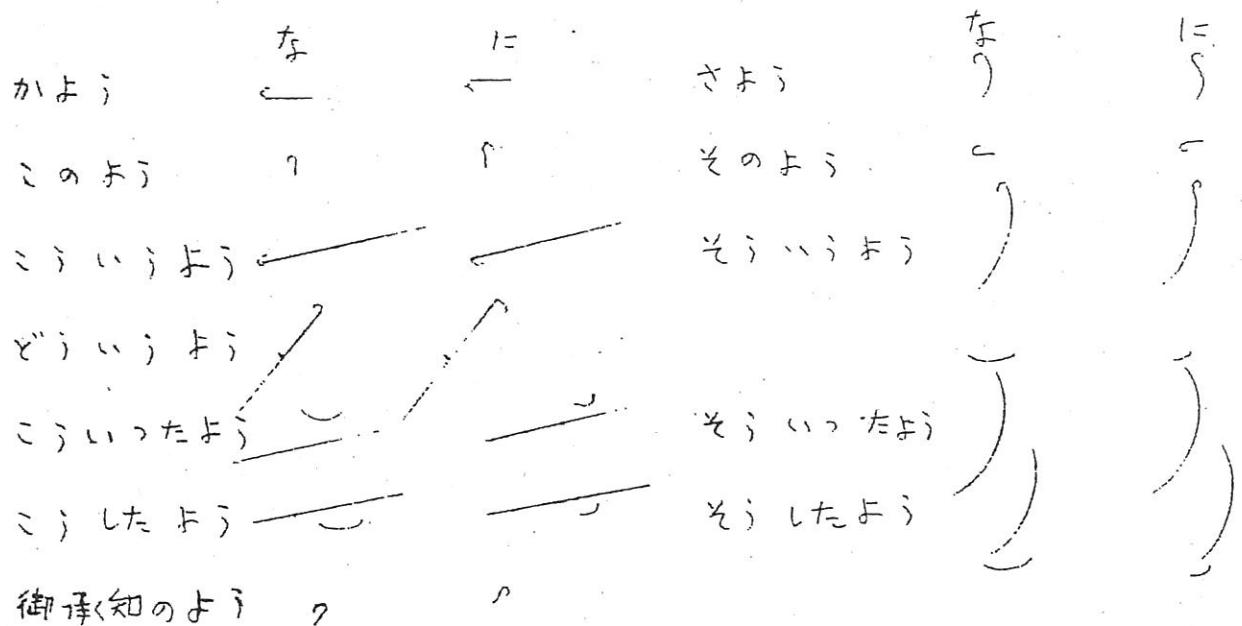
例 いきくつ のつく複音

赤々	○	亥亥	〃	切々	〃	噴々	○
真々	○	惣惣	?	諺諺	○	勃々	○
怪々	○						

例 語音つとの添えもの

あつと	○	さつと	○	くうと	○	ざつと	○
やつと	○	ほつと	○	じつと	○	じつと	○

よ；な よ；に の添えもの



のとおり の添えもの

	のとおり	のとおりに	のとおり	のとおりに
御承知	×	×	お詫	+
御存じ	×	×	予定	△

かもしれない を含むもの

これは打ち消しの作用で、かもしれないを省略して表現いたします。

例 しない しれん しれず しれません

なるかも	フ	フ	フ	フ
言；かも	フ	フ	フ	フ
そ；かも	フ	フ	フ	フ

ところを含むもの

ところを省略して、よりの変化を書きます。

よると よれば よりますと よりますれば

聞くところに ヲ 入

見るところに ヲ 入

伝えるところに ヲ 入

伝うるところに ヲ 入

を得の入るもの

語尾	ざるを得ない	ざるを得ん	ざるを得ません
えけせてねへめれ	ヰ	ヰ	ヰ
あかさたなはまやらぬ	ヰ	ヰ	ヰ

ながら ない ず なかった ん ません

やむを得 く ク ル ン ン ン
○ ○ ○ ○ ○ ○
く く く く く く

いにしがかわらす の添えしの

らず りませず らず りませず

しかるに もかかわ リ ャ それにもかかわ ヲ ヲ

存するに いにしがかわ ヲ ャ 答弁にもかかわ ハ ハ

ると れば の添えもの
 すと せば

ると れば ますと ますれば
 言い換え → へ て し
 換言す → へ て し
 換言いたず → へ せば て し
 ややもす → へ へ て し
 ややもいたず → へ へ て し
 ややともす → へ へ て し
 ややともいたず → へ せば て し

までも の入るもの

	なからう	ない	なく	ありません
申すまでも	○	○	○	○
申し上げるまでも	○	○	○	○
言ひまでも	○	○	○	○

然として の添えもの

これは七期生の考案した方法であります。おもしろいので紹介しておきます。組み立て方は、然(ゼン)→前(ゼン)→前(マエ)→まい(否定)と、として○と結合させたものであります。

然として ○

例

然として	然として	然として	然として
亞	メ	暗	メ
散	一	象	メ
混	一	索	メ
肅	イ	整	メ
情	ク	漠	メ
鬱	フ	漫	メ
歴	メ	冷	メ
			茫

然たる の添るもの

前に たる を書く 寓意の方法であります。

然たる	然たる	然たる	然たる
暗	ノ	陰	ノ
雜	ノ	純	ノ

略字

あえて	レ	間	〇	相次いで	メ	相交わらず	ヨウラズ
あくまで	レ	あくまでも	メ	あながち	メ	あらまし	ラマシ
あたかも	〇	ありかじめ	一	あらためて	メ	あまたさえ	ラタスエ
あらゆる	リ	あれこれ	メ	ある	メ	あわせて	ラセテ

余り ～ 余りに ～ 余りにも ～ あにはからんや 6
明らか ～ 今 ○ 一再なうすの いかに ～
いかなる～ いかにも～ いかにして いかにすれば 8
いささか) いずれ ～ いずれも ～ いずれでも ～
いずれに る いずれにしても も ～ 一がいに ～
いつか ～ いついつか ～ いついかなる～ いつなんどき リ
いつも ～ いつごろ も いつまで ～ いつまでも ロ
幾つ も 級度 も いくぶんも も いやゆる ロ
苗くら も いろいろ も いろんを〇～ いろいろを も
一た 1 いよいよ チ いやあたしに ブ いつ早く ハ
一日も早く人 今一つ も 今更 の いまだ 9
今や も 今一度 も おおむね ハ お互い 8
惜しむらくは も 恐らくは も 同じ ハ およそ 1
おおよそ メ おのの の おのずから ブ 往々に ハ
及ばずながら 重ねて ハ かけて加えて ハ 握り揃んで ハ
必ず ～ 必ずしも ハ 必ずや ハ かかる ～
おりそめ ～ かりそめにも → かれこれ ハ シたして ハ
このたび レ 今度 も ことさら ハ ことごとく ハ
さておいて ハ さておきまして ハ 幸い ハ 先ほど ハ
先ほど來 ハ 更に進んで ハ 差し当たつて ハ 差し当たりまして ハ

しばらく よ しばらくおいて よ しばらくおきまして よ、 しばしば
しかばば よ しかしとすれば よ (からざる よ しかばんば よ
しかるべき よ しかるべき ハ しかれども よ しかりといえども よ
しかも よ しかし よ しかしながら よ 実に よ
したがって よ したがいまして ○ よ 今後とも よ 主として よ
すいぶん よ 少ない よ 少し よ 少なくとも よ
少なくて 少なからず よ 少なからざる よ すぐ よ
すぐさま よ すべからく よ すべて よ すなわち ○
せめて よ せひ よ せひとも よ せがみてても よ
そのまま = そのままに よ その後 よ その他 ○
そのほか 7 そのほかに 7 それ 7 それから 7
それとも 7 それのみならず 7 それゆえ 7 それゆえに 7
直ちに / たゞん / たしか / 互い 8
忽ち / ただ ○ 単に / ただ単に 3
ただいま 第一に ン たとえ | たとい
たとえば | たとえて | たとえれば | たとえといえば
たとえていようと | たとえていいまと | たとえてみると | たとえてみれば
たとえてみますれば | たとえてみますと | たとえていいますれば |
たとえますれば ○ | たから | たいてい | 近ごろ
できるだけ ? | できるだけ早く | できるだけ速かに | できるだけ
96

てたらめに 手早く ハハ 手取り早く ハハ 散頭散尾
どうも ハハ どうしても ハハ とかく ハハ とにかく ハハ
とにかくにも とにかく ハハ とにかく ハハ ともかく ハハ ともに ハハ よく
ともどもに ハハ なあ 一 何も ハハ 何から何まで ハハ
何か ハハ 何かも ハハ 何分にも ハハ なんら ハハ
なんらか ハハ なんとかして ハハ なんとか ハハ なんとなり
ますれば ハハ なんとなれば ハハ なんといふ ハハ
なんといつても ハハ なんといいましても ハハ なんと申しても ハハ
なんと申はしても ハハ ハハ 並びに
なあさら ハハ なせ ハハ なにゆえ ハハ なぜならば ハハ
なにゆえあらば ハハ なるほど ハハ なるべく ハハ なかなか ハハ
なんとなく ハハ いわかば ハハ にわか ハハ 原因かくは
ねんごろ ハハ 念のため ハハ 念のために ハハ 残りす
望むらくは ハハ のみならず ハハ はなはだ ハハ 初め
初めて ハハ はたして ハハ はたまた ハハ はたしてしかば
ひとり残りす と ひとりなりす ハハ 非常事 ハハ 非常に ハハ
不思議 ハハ 別に ハハ 別段 ハハ ほとんど ハハ
ほほ ハハ はからずも ハハ また ハハ まつたく ハハ
まことに ハハ ます ハハ ますもつて ハハ ます"初めに ハハ

まず第一に します最初に ! まだ まつすぐ ~
まつすぐには ~ まじめに ~ 漫然と ~ まことにごもつとも ~
まことにもつとも ~ 稀に見る ~ 間もなく、間違いもなく ~
目のあたりに ~ まかり間違えば ~ 曲りなりにも ~
廻り廻って ~ みすから ~ むしろ ~ むろん ~
無理に ~ 無理やりに ~ むやみに ~ むやみやたらに ~
むちやな ~ むちやくちやに ~ むちやくすやな ~ めつたに ~
もと ○ もともと ○ もっとも ~ もちろん ~
もつともつと ~ もはや ~ シレモ ~ もっぱら ~
もとより ~ もしくは ~ もうもう ~ もう少し ~
もうしばらく ~ まいましばらく 旦 もう一度 ~ もう一ぺん ~
やがて ✓ やはり ↗ やはりせに ↗ やえに ○
よほど P 容易に ↗ よくやく ↗ 要するに
ほかに ~ ともにともに ↗ と共に ○ ×同時に
同時に ○ はたせろかな ↗ ちよつと ↗ ちよど
これを要するに = ↗ 案するに ○ よかれあしかれ?
限り ↗
能限り できる限り 得る限り 知る限り

接続言詞

語と語の中間に介在して、両方の語をつなぐ副言語がありますが、この副言語は無活用語でありますし、ある約束のルールに縛られると思ってられない品詞でありますので、頻出度の高い言葉は、おのずから略字の形式をとらざるを得ません。

略字

あるいは あいだ … … 及び カたかた ○
かつまた 一 けれども > けれど ここに ○
そこに ペ したがって × したがいまして ○ ペ ○
そもそも カ ついては ○ つきましては ○ ないし ○
続いて ○ 続きまして ○ → ○ 引き続き =
引き続きまして ○ = 続けて ○ 続けまして ○
もまた ペ

副言語、接続言詞と、分けましたが、この区別は、どちらに入れてもいいものがありますのでつけないでよかったです。

体 言

体言とは 1. 事物の名をいふ体言（名詞） 2. 事物を指示する体言（代名詞） 3. 事物の数量、川順序を数える体言（数詞） などとあります。

会議に使われる音声言語の中では、体言の頻出度は用言の頻出度よりも音数においては高い。

記線運動の方からいふと、記線運動が車両かに付与されるのは動詞助動詞の表現方法がうまくできているからでありますし、逆に記線運動を困難にするのは体言を表現する形式が、用言のスムーズさとマッチしていないからであります。

体言は二音一線化はできやすいけれども、三音一線化、四音一線化といふのは、ある特別なものと除いたり、たしかめてきにくいうあります。

形式体言

ここに掲げる略字は、もちろん実質体言として使用しますが、その使用頻度が実質語としてよりも形式語としての方が高いので形式体言としました。

こと 1 ところ ハノ もの ー ため ○ わけ く
はず し 仕事 よ 建物 ✓ ものごと ー く
100

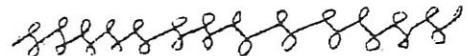
同行綴字

符号は求心力を利用して書くのが理想的であります。たとえば

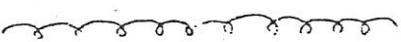
A 

A 

B 

B 

A 

B 

をみると、同一時間内においては、BはAよりも10%以上も余計に書くことができます。それは、Bは求心力を利用しながら書くのに対して、Aは求心力を利用することが全然できなからであります。

單画線ばかりの綴りは求心力に反抗する書き方とあって、筆勢運動はブレーキを書けるよう左形にあるので、求心力を利用しやすいようにするのがこの同行綴字の方法であります。

この同行綴字の方法は、これによつて画数が減るといふものではありませんで、記線運動の円滑化に目的をおいたものであります。その方法は、同行音の符号で、

二音目ユ列の場合第一音目の符号の頭に鍵を付します。

二音目シ列の場合第一音目の符号の末端に○を付します。

二音目リ列の場合第一音目の符号の末端に×を付します。

二音目エ列の場合第一音目の符号の末端に△を付します。

二音目オ列の場合第一音目の符号の末端に□を付します。

型の例として長行綴字を挙げてみますと、

二音目 ka ki ku ke ko

一音目

ka ↗ ↗ ↗ ↗ ↗
ki ↗ ↗ ↗ ↗ ↗
ku ↗ ↗ ↗ ↗ ↗
ke ↗ ↗ ↗ ↗ ↗
ko ↗ ↗ ↗ ↗ ↗

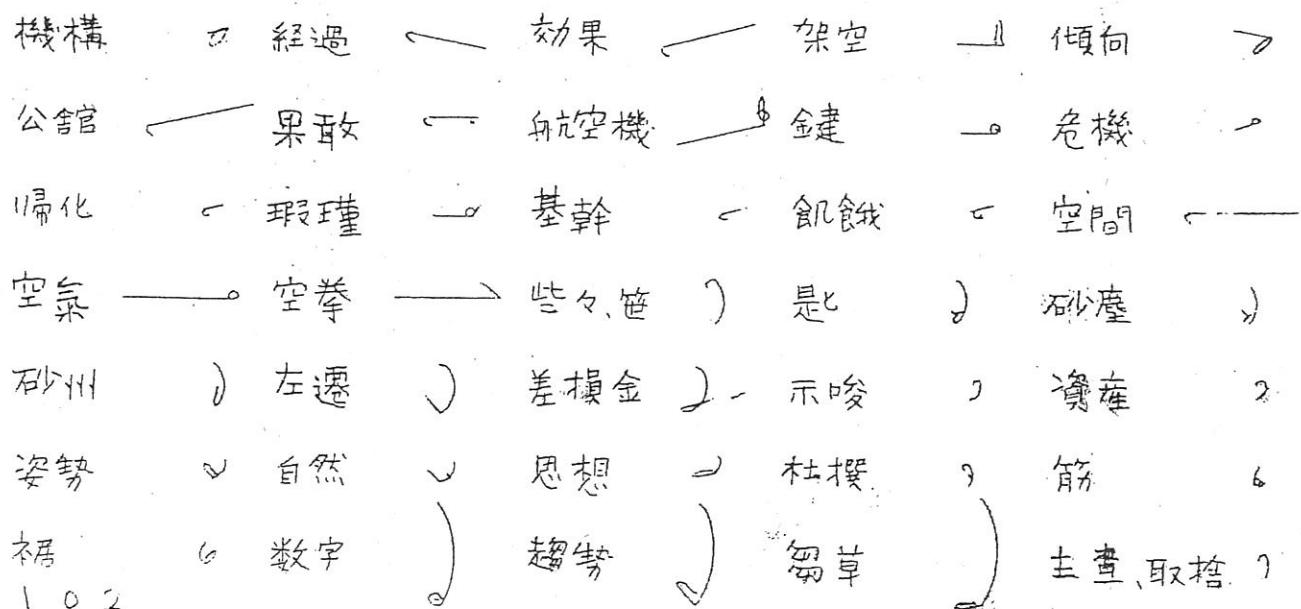
二音目符字の方向に液体書きをするものの例を挙げますと、

s a s o ↗ s i s o ↗ s u s e ↗ s e s o ↗
s o s o ↗ t u t u ↗ n a h o ↗ n i n o ↗
n u n o ↗ h a h e ↗ h e h e ↗ m o m e ↗
s u s o g ↗ h a b o ↗ h o h o ↗ j a j o ↗

A行は二音目kiとします

A k i ↗ i k i ↗ u k i ↗ e k i ↗ o k i ↗

以上の綴りによってできる語の例



趣旨	世辞	世人	精查	政治	
成人	税制	生鮮	生存	政争	
製造	阻止	集散衆參	收支	收拾	
修正	終戦	重奏	莊子	造成	
多端	質	権	多島海	韋駄天	
知多	地点	治道	土	伝	
低地	泥炭	統治、當時	盜電	到頭	
幅	破片	比々	日本	不備	
不敏	防備	法文	防風	方便	
豆	耳	米収	木綿	桃	
揶揄	猶予	余裕	代々木	リラ	
離々	理路	理論	老練	料理	
縷々	冷嘲	冷々			

撥音を挟んで同行となるものの綴字例〇^x

暗記	陰気	延期	看過	寒氣
換金	還元	冠婚	残渣	暫時
人心	真摯	戦時	孫子	京師
均衡	申請	何人	何年	反比例
分布	今後	樽組	基準	満面
乱離	倫理	論理	亂療、乱診	

詰音を抜んで同行となるものの綴字例

却下	○	客觀	○	活氣	○	恪勤	○	学区	○
雑誌	○	刷新	○	立風森	○	嫉視	○	失心	○
比正	○	実勢	○	実踐	○	失踪	○	出所	○
塔頭	○	脱免	○	脱党	○	丁稚	○	铁塔	○
突堤	○	發布	○	發破	○	発奮	○	拔本	○

1を抜んで同行となるものの綴字例

凱歌	○	外觀	○	会期	○	會議	○	解禁	○
会見	○	階級	○	回顧	○	外交	○	海峡	○
細心	○	最終	○	再生	○	宰相	○	水深	○
水準	○	大地	○	大典	○	抬頭	○	船蕩	○
追悼	○	廢品	○	配付	○	配分	○	買弁	○

キクツを抜んで同行となるものの綴字例

闇議	○	覺悟	○	各号	○	国語	○	擷取	○
昨春	○	昨秋	○	作戦	○	錯綜	○	宅地	○
逐次	○	適地	○	適度	○	適當	○	芸薹	○
北部	○								

字 音

昭和 21 年 9 月 21 日の国語審議会第 11 回総会において現代かなづかいが本きまりとなり、音韻の表現が発音主義に改められて、音韻が単純化されましたために、字音の種類は

1 音のもの 1 種類 擬音のもの 1 種類
 長音のもの 1 種類 複字音のもの 14 種類 となつた。
 このうち、14 種類の複字音を分析して、頭音と尾音との関係を調べてみると

頭音の列	尾音	備考
あ	いくつ	
い	きくちつ	尾音ち及びい列きのもの稀
う	くつい (すい、つい、るい)	僅少
え	きつ	
お	くつ	

国語の速記においては、字音の存在のために、記線の種類の単純化といふことでは、大いに準をしてているのであるが、半面、文字言語に表現する場合に、平声 上声 去声 入声 の四声の行なわれていまいわが国においては、字音はほとんど“平調”であつて、音韻的印象も薄く、同音異義文字の区別のむづかしさとか、文字の記憶のむづかしさのために、話者の意思を文字言語に再現するのに、いかに

苦労をするものであるが、想像外のものがあります。

1音のもの、撥音のもの、長音のものは基礎となる基本符字で表現するので問題はありませんが、複字音を一線化して、速記の速度性と単純化を図ります。

まず順序として浊音符の応用から始めます。

浊音符の応用

浊音符を打つ場所によって記録の節約を図る方法です。普通の浊音は符字の中間に打って表現することはすでに8頁9頁11頁13頁14頁15頁の表通りですが、符字三分の一以上の頭部に浊点符を付けて前浊音後清音を、符字三分の一以上の下部に浊点符を付けて前清音後浊音を表現いたします。これはもちろん国音にも通用して使います。

例

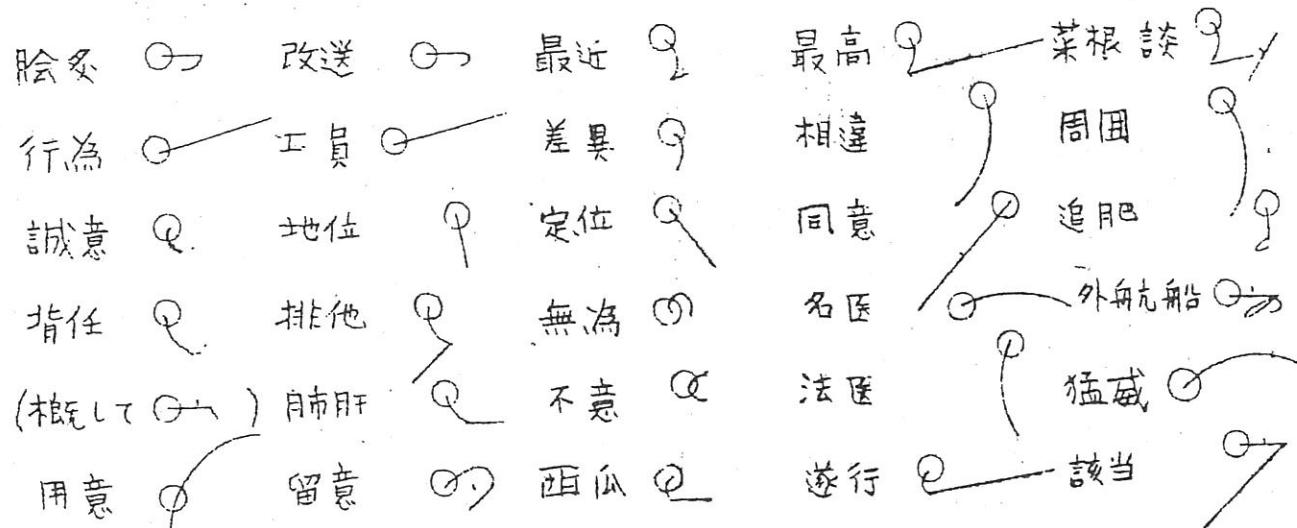
画家 ← 一自信 ノ 稅制 ノ 七 同等 ノ / / 蔵相))
軽減 ← 一 想像 ノ) 風間 G C 九牛 ノ , 戰前 O
今後 O → O →
鏡 ← 一 出て ノ 帽の ノ ノ 緩み ノ ノ 止め ノ

主として前に使用する複字音のうち2列目にのつくもの
その前ぶれは104頁イを挿んで同行となるものの綴字例を掲げて
ありますが、前の符字に、2列目にイを含む符字（iは省略）の先を交
106

又させて表現します。

これは複字音とは別に、二音目「」を含む熟語の場合にも応用して使います。

例 応用も混せて



又例に「」のつくものの独立符字

あい 〇 かい (上側用) 〇 さい (下側用) 〇 たい ない 〇 〇

はい 〇 まい ウ ルい 〇 だい 二

綴字例

あいまい ノ 愛玩 ニ 会社 ロ ロ 裁判 九 指頭 ハ
内簡 ハ 败戦 ハ 捶帶 ハ 来年 ハ 月妊娠 ハ
毎時 ハ 概算 ハ 握算 ハ 財政 ハ 封伍 ハ
代価 ハ 太陽 ハ 最初 ハ 最上 ハ

主として後に使用する複字音符字

熟語の場合、あとが複字音の時の複字音を単純化した符字によつて表現しようとするものであります。

初めの音	尾音	符字
ア列	i	、
エ列	ku, tu	-
イ列	ku, tu, ki	।
ウ列	ku tu	(
エ列	ki, tu	\
オ列	ku, tu	/

ここに掲げた符字を何らの前提条件、約束もなしに使用すると、たゞえば開会と開催、明確と明白のように読み分けることの困難な熟語にはばかりますし、結局読み分けることができても読み分けるまでに相当時間がかかります。速記綴りはいと見て、語法上から簡単に読み分けることができることが大切であります。読み分け方の簡単な方法として複字音の初めの符字の走る方向を利用いたします。

すなわち

あかなま　。——へ行の複字音は前符字の右、中心線上に書く。

さしゃ ちやわ) シ | ^ } ツ "

前符字の直下に書く。

りや はら (ノ ノ "

前符字の右斜下に書く。

きや よ ノ [(] ノ "

前符字の右斜上に書く。

例外として　たい、たく、ちよく、やく　は前符字の右斜上に書く。

字音の熟語が非常に多く、挙げれば際限のないことがあります。複字音又列に「のつくものから、具体的に例示して見ましょ。

又列に「のつく複字音

頭音	尾音	符字とその書記位置	逆記
	い		
あ、か		○、	。上向
ナ		○、	。下向
た、や		○、	。上向
は、ら		○、	。下向

例

案外	い	意外	ハ	迂回	二	雲海	一	遠大
科外	一	眼界	一	閑西	一	金塊	一	近來
近代	一	期待	一	軍隊	一	現代	一	混載
今回	一	元來	一	三彩	二	些細	？	震災
公債	一	功罪	一	官界	一	經濟	一	限界
斯界	二	侵害	二	損害	二	反対	（	本来
全廢	二	巨細	一	到来	/	倒壊	/	粉碎
慘害	二	虫害	1	停会	/	停滯	/	仲裁
破壞	二	破碎	2	被害	6	被從	4	返済
弁清	二	弁解	2	本会	2	未済	一	未開
面会	一	免罪	一	問題	一	門外	一	

2列に k u, t u のつく複字音

頭音	尾音	符字とその書記位置
	く, つ	
キ, カ, ハ		○ー
チ, レ, テ		○ー
タ, や, ちや, きや		○ー
ヒ, リ, リ		○ー

例
企画 一 区画 一一 始末資格)-L 明確 侵略
 菲芸 二 比較 〇-〇-被爆 〇- 張沫 〇- 飛躍
 漂白 〇- 審客 〇- 頻發 〇- 不覺 〇-〇- 不始末 〇
 托付 〇- 粉末 〇- 併託 〇- 開幕 〇- 逐却 〇
 韶捷 〇- 弁駁 〇- 方策 〇- 忙殺 〇- 逢着 〇
 防遏、暴压 〇- 包括 〇- 驅逐 〇- 泡沫 〇- 捕獲 〇
 保糸 〇- 連脱 〇- 摩擦 〇- 麻薬 〇- 附着 〇
 味覚 一 味とんちやく 〇- 命脈 一一 盟約 一一 迷惑 〇
 網膜 一 模索 〇- 味んちやく 〇- 誘惑 〇- 驚躍 〇
 謗惑 〇- 癒着 〇- 亂獲、仰轍 一一 亂作 〇- 乱雜 〇
 亂伐 〇- 亂発 〇- 離脱 〇- 陵虐 〇- 了察 〇
 糜糊 〇- 輸郭 〇- 輸作 〇- 零落 〇- 連絡 〇
 驚愕 〇- 惶惑 〇- 跳躍 〇- 著作 〇- 沈着 〇

例にki, miのつくもの

頭音	尾音	符字とその書記位置	尾音
	く、つ		き
いき い え		〇	いき い
し		〇	しき い
ち		〇	いき い
ひ り		〇	り

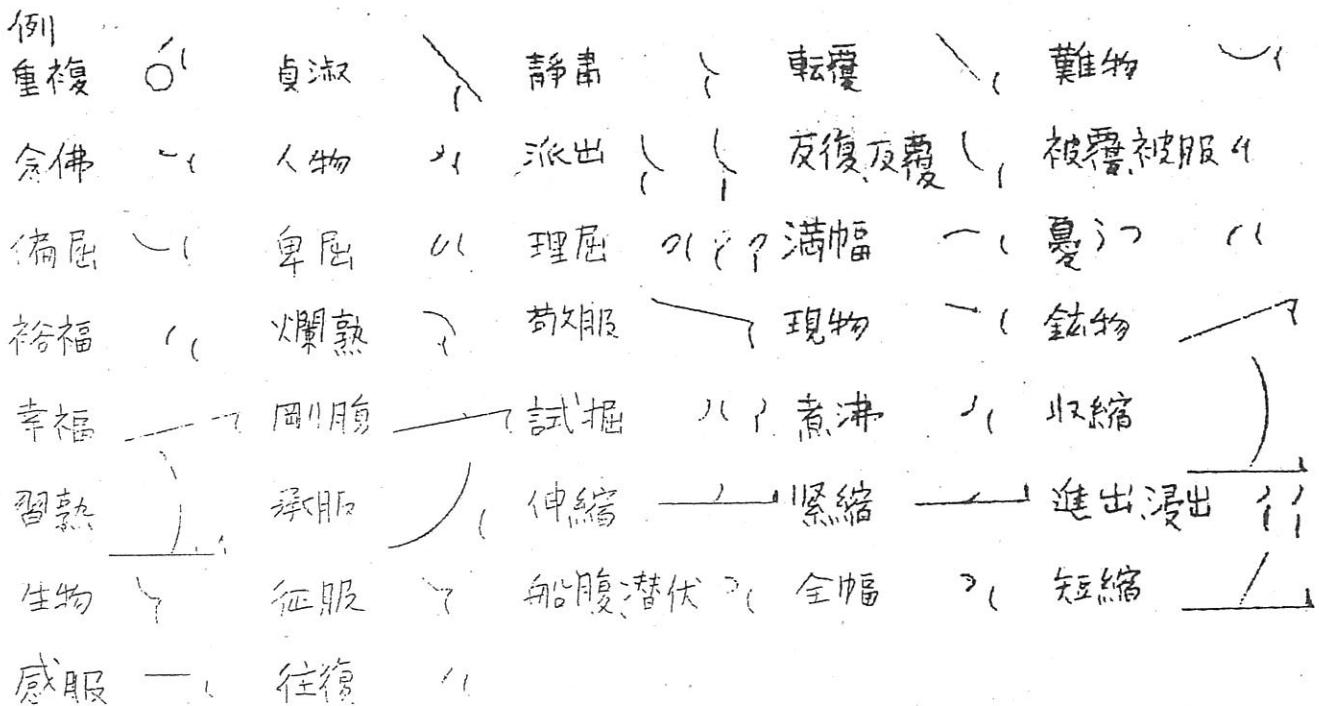
例

唯一	い	有畜	い	輸出	く	地質	い	知悉	い
緻密	い	抽出	い	稠密	い	著述	い	貯蓄	い
陳述	い	提出	い	俗率	い	鼎立	い	天日	い
認識	い	捻出	い	能率	い	備蓄	い	秘密	い
比率	く	懸逸	く	標誌	く	品質	く	扶育	く
撫育	く	不文律	く	分筆	く	並立	く	保育	く
法域	お	放逸	お	万一	い	滿喫	い	漫筆	い
万々一	お	安逸	い	名実	い	綿密	い	親密	い
綿密油	い	免點	い	家敷	い	認識	い	知識	い
湧出	く	養育	く	擁立	く	乱立	く	流域	く
良識	い	連立	い	露出	い	詰術	く	緊密	い
嚴密	い	筋肉	い	苦肉	い	堅實	い	公述 口述	い

U列 I=ku, tu のつく語

頭音	尾音	特字とその書記位置
	く, つ	
き	く	〇
し	く	〇 一〇
ハ		〇

しゅつ は、
しつ を使
つて表現し
て山羊ろし
。



例にki, ttiのつくる

頭音	尾音	符号とその書記位置
	き, つ	
け, けい		○\
せ, て(的)		○\
え, へ, わ		○\
て		○\

例

可決	一	帰結	一	簡潔	一	近接緊切	二	間接	一
架設	一	岸壁	一	鑑別	一	湮滅	八	演説	八
完璧	一	貫徹	一	誘掖有益	一	優劣遊歴	八	刺激	八
損益	八	差益	八	判決	八	裨益	八	無益	八
明晰	一	熾烈	八	指摘	八	演繹	八	応益	八
瓦れき(築)	一	隙隙	一	冠絶	一	縷說	八	陥劣	八
廉潔	八	従役超越	○	陳列	八	痛烈	八	痛切通説	八
締結	八	帝劇	八	転轍	八	虐滅	八	凍結	八
透徹	八	途絶	八	粘結炭	八	否決秘訣	八	剽竊	八
披瀝	八	擗斥	八	斧鉄	八	不可欠	八	憤激	八
侮べ(義)	八	分析	八	分別	八	併設	八	並列	八
変節	八	遍歴	八	法益	○	紡績	○	包摂	○

補欠	(墓穴	(滿悅) 霧笛	?) 免疫	
免責面積	(面接	(妄說) 猛烈	閑絕	
優越	(遊擊	(融雪	(輸血	溶液用役	
用益權	(要役地	(要訣	(容積	溶接、夭折	
羅列	(利益	(流血	(復歷	鑿鉻石	
隣接	(りん列	(急激	(矫激	凝結	
業績	(拒絕	(懸絕	(建設	交易、公益	
高潔	豪傑	功績鉛石	巧拙、若說、障設		
豪雪	公的	更迭	後天的	先天的	
痕跡	懲罰	根絕	挫折	蹉跎	
慘劇	(使役	(詞鑿石	(刺激	史蹟	
事蹟	(使節固	(自說、時節	(私的	射擊	
謝絕	(収益、就役	(襲擊	(終結	集積	
重責	(主席、首席	(衝擊	(定石	饒舌	
障壁	(書籍	(除斥、除籍	(諸說	序說	
親切	(親戚	(成績	(借趣	選別	
霜雪	(掃滅	(狙擊	(碰石	打擊	
妄結	(脏漏	(分蘖	(治績	維持	
置籍船	(船籍書	(妄結	(团結	殘欠	
心血	(新劇	(創設	(小說	万別	

○列はku, tuのつづりの

頭音	尾音	符号とその書記位置
	く つ	
あ こ く		○ /
そ しょ		○ /
と ょ ちょ きょ		○ /
ほ ろ りょ		○ /

例

暗黒	く	異國	く	家屋	→	觀測	く	家族	く
帰属	く	金属	く	氣骨	く	究極	く	虛飾	く
輕率	く	係屬	く	原則	く	原告	く	被告	く
原局	く	謙抑	く	公告、布告、抗告	→	拘束梗塞	く		く
公職時職	く			抗張力	く	公僕抗木	く	蚕食	く
山麓	く	死沒	く	社稷	く	修飾	く	往哲	く
充足	く	終息収束	く	拾得	く	珠玉	く	酒色	く
殉職潤色	く	純朴	く	小食	く	小国	く	化国	く
消息	く	消極	く	裝束	く	衝突	く	序曲	く
資力	く	申告深刻、報告	く			親睦	く	人力尽力	く
生息	く	精力勢力	く	染色	く	潜勢力	く	戰沒	く
裝飾	く	增殖	く	總督	く	藏匿	く	祖国	く

遜色	存續	損得	彈力	恥辱
蛇足	地目	忠告、注目	超克、彰刻	沈默
通告	通則	通俗	帝國、定期	盜賊
唐突	眩目	唐突木	登録	難局、南極
難色	破局	反骨	反則犯則	伴食
繁殖	卑俗、卑屬	秘密	眉目	平仄
病沒	本則	本国	敏捷	誣告
腐食虫	侮辱	不測、不足	附屬	閉塞
報告	飽食	法則	補足	保続
満足	魅力	民力	民俗、民族	無力
面目	兔體	面目	望蜀	奉職
遊戈	諭告	陽極	陰極	養殖
葉綠素	亂詭	利害	利殖	童骨
立木流木	連續	凌辱	良俗	兩得、領得
隸屬	飲食	牢獄	朗詭	了得
灣曲	脆弱	社告	規則、蠶束、氣息、窺測	——
判詭	專屬	奸販	禁足	空谷
後続	抗毒素	鉻毒	陷沒	誤植
姑息	鴉篇	混交林	至極	駿足
準則	常綠	戰力	暖國	短息

複字音と複字音の綴字例

挨拶	二 生憎	？ 改革	一 外國	開設	○、
獲得	フ 格別	ハ 確立	フ 確実	丁 學說	○、
玉碎	○、 國際 国債	？ 国外	？ 国会	フ 開會	○、
開催	○： 大会	○、 大体代替	○ 再会再開	○、 憶偶	○、
各界	○ 一 曲折	○< 曲解	○ 画一	一 届辱	○、
屈服	○(結核	○、 欠席	○> 結託	ハ 結局	○、
結束	○、 決着	○、 訣別	○> 結膜炎	フ 決裂	○、
極悪	○< 固体	○> 国籍	○< 穀穀	一 黑白	○、
克服克復	(採掘) 操決裁決	入 再々	？ 歲出	P) 9
採掘	） 采配	？ 賤闊	？ 錯雜	9 昨日	9
錯覺	○) 色彩	○ 識別	○< 素皆	○, 極枯	○,
實際	○, 実質	○> 実績	○> 失態失對	○, 実態	○,
失墜	○, 失敗	○, 質朴	○ 弱体	○ 灼熱	○,
若輩	○, 寂滅	○ 祝杯	○< 宿泊	○ 述懐	○,
出穂	○, 出沒	○ 植裁	○ 痕賊	○, 触媒	○,
囁呴	○, 食欲	○ 触覺	○, 隨一	○ 衰弱	○,
衰退推戴	○ 垂直	○ 積載	○ 昔日	○, 脊椎	○,
寂莫	○, 惜別	○ 批策	○ 接觸虫	○> 拙速	○,
絶対	○? 說得	○, 說伏	○? 絶壁	○? 節約	○,

即席 ○ 束縛 ○ 即決速決 ○ 即刻 ○ 畏國 ○
率直 ○ 旱速 ○ 失格 ○ 退屈 | | 對決 | |
滯在 ○ 貸借 ○ 滯水、耐水 ○ 推積 ○ 大切 ○
大久的○ 題目 ○ 大約 ○ 拓殖 ○ 卓拔 ○
脫却 ○ 脫離 ○ 脫退 ○ 脱落 ○ 奪略 ○
逐一 ○ 蔽賊 ○ 蕢積 ○ 室息 ○ 着實 ○
着々 ○ 着服 ○ 着目 ○ 着陸 ○ 直接 ○
追憶 ○ 追尋 ○ 追隨 ○ 追跡 ○ 墜落 ○
追錄 ○ 故憶心 ○ 摘出 ○ 適切 ○ 審對 ○
撤回 ○ 適格的確適確 ○ 易抉 ○ 鐵骨 ○
鐵石 ○ 撤退 ○ 鐵趣 ○ 撤廢 ○ 鐵壁 ○
篤學 ○ 独裁 ○ 得策 ○ 得失 ○ 流職 ○
毒舌 ○ 督促 ○ 独得 ○ 得々 ○ 特別 ○
突発 ○ 内閣 ○ 内寔 ○ 内陸 ○ 納得 ○
熱烈 ○ 媒介 ○ 壳却 ○ 排擊 ○ 排水、廢水 ○
敗退胚胎 ○ 壳得金 ○ 敗北 ○ 傷害 ○ 配列 ○
迫害 ○ 爆擊 ○ 舟載 ○ 博識 ○ 白日 ○
薄弱 ○ 白晝 ○ 莫大 ○ 爆發 ○ 迫力 ○
養育 ○ 伐採 ○ 登出 ○ 拔擢 ○ 登然 ○
登足 ○ 伐木 ○ 複雜 ○ 副食 ○ 輿輿轍 ○

腹背○、辟易○、犀靈○、別々○、牧畜○
 朴訥○、沒却○、牽縫○、埋設○、埋沒○
 淀却○、目擊○、黒殺○、沐浴○、目錄○
 藥剤○、拖殺、薬殺○、約束○、掠奪○、抑壓○
 翼々○、秉垂○、落着○、落魄○、力作○
 力説○、立脚○、立錐○、類推○、累積○
 歴代○、歴々○、劣悪○、劣弱○、列席○
 剎々○、肋膜○、碌々○、歪曲○、惑湯○

成語 1

それが対語であると反対語であるとに關係なく、前づ熟語符字の上に横線を引いて、他の熟語符字の記録量を節約する方法であつて、これは學習者の語彙(い)が豊富であればあるほど利用範囲は広くなります。

これに例外がありますが、例外は数少ないので、抜き出して後で掲げておきます。

綴字例

暗中模索	フ	一舉足一投足	フ	唯々諾々	。
一衣帶水	フ。	一蓮託生	フ	一部始終	フ。
意識不明	フ。	一目瞭然	フ	一切合敗	?

一心同体	1)	一泻千里	2)	一石二鳥	?
一刀兩斷	1)	萎靡沈滯	2)	淫祠邪教	?"
以心伝心	?	一拳兩得	?	異口同音	?"
糸余曲折	?	雲散霧消	1)	有象無象	?)
有為轉變	n	円転滑脱	1)	遠慮會釈	1)
溫故知新	—	苛斂誅求	—	換骨奪胎	—

あとはこの左用をすれば事足りるので、成語を掲げるだけにしておきます。

冠婚葬祭	我田引水	侃々諤々	加餐倍蓰	臥薪嘗胆
画龍点睛	驚天動地	規矩準繩	金城湯池	起死回生
拱手傍觀	金科玉條	玉石混淆	機會均等	曲學阿世
危機一髮	旗幟鮮明	疑心暗鬼	奇想天外	急轉直下
勤務評定	鉢狀価格差	共同一致	虛心坦懷	居中調停
譽譽褒貶	欣堯蕕躍	金鷄勳章	空前絕後	決選投票
原因結果	牽強附會	喧々囂々	乾坤一擲	捲土重來
金匱無缺	堅忍不拔	言語道斷	草菅兩造	金融梗塞
苦心慘沮	公租公課	巧言令色	光彩陸離	更始一新
公序良俗	荒唐無稽	刻苦勉勵	五分五分	五里霧中
綱紀肅正	虎視眈眈	吳起同舟	個々別々	日暮日彌久
互三再四	三々五々	債權債務	左顧右盼	三位一体

疾風迅雷	自暴自棄	揣摩情測(曉)	周章狼狽	首尾一貫
秋霜烈日	主客転倒	枝葉末節	常往座臥	情狀酌量
正真正銘	小心翼翼	新陳代謝	森羅万象	人心悔々
孜々嘗々	時々刻々	唇齒輔車	勝算歷々	熟讀玩味
神出鬼沒	自圓自贊	信賞必罰	質疑答答	首鼠兩端
支離滅裂	自大衣郎	實踐漸行	時代錯誤	拘子定規
齊東野人	袖手旁觀	頑冥不靈	支持僵格	指示僵格
醉生夢死	切磋琢磨	切齒扼腕	絕體絕命	凌空菲才
前古未曾有	千載一遇	戰々兢々	前途遼遠	千篇一律
善隣外交	造次顛沛	速戰即決	千差萬別	樽俎折衝
生殺與奪	正々堂々	是非非々	泰山鳴動	大器晚成
大同小異	大政凜然	單刀直入	大声叱呼	大風一過
耐用年數	曖昧飽食	簞食壺漿	泰然自若	治者被治者
中途半端	朝令暮改	跳梁跋扈	直情徑行	直截簡明
貨貨價格	治山治水	適材適所	徹頭徹尾	天衣無縫
轉轍反側	徒衣徒食	同工異曲	道聽塗說	東奔西走
党利党略	特用作物	徒手空拳	難行苦行	內憂外患
年々歲々	指揮橫領	芸志弱行	博聞強記	博覽強記
馬耳東風	拔本塞源	半官半民	盤根錯節	半信半疑
繁文縟礼	反間苦肉	爪牙易主	悲憤慷慨	月巴培管理

不俱戴天	不撓不屈	附和雷同	不即不離	文理解紙
分餌弁済	粉飾預金	粉骨碎心	不要不急	不偏不党
歩積双両建て	浮華輕挑	輕佻浮薄	平身低頭	傍若無人
暴虎馴河	法三章	抱腹絶倒	本末顛倒	名詮自性
無我夢中	無理無体	明鏡止水	明哲保身	明白白々
面從腹背	勇往邁進	有價証券	優勝劣敗	融通無碍
羊頭狗肉	亂離骨灰	流言蜚語	龍頭蛇尾	兩罰規定
理路整然	累犯加重	冷汗三斗	練達堪能	

表現に区別の必要存札の例

空中樓閣	——	空中分解	——	片言隻的	×
片言隻語	×	權謀術數	—	權謀術行策	→
朝三暮四	丶)	張三李四	丶)	一事不再理	丶
一事不再議	丶)	獨立核算	丶)	獨立不羈	→

助詞の入るものとの例

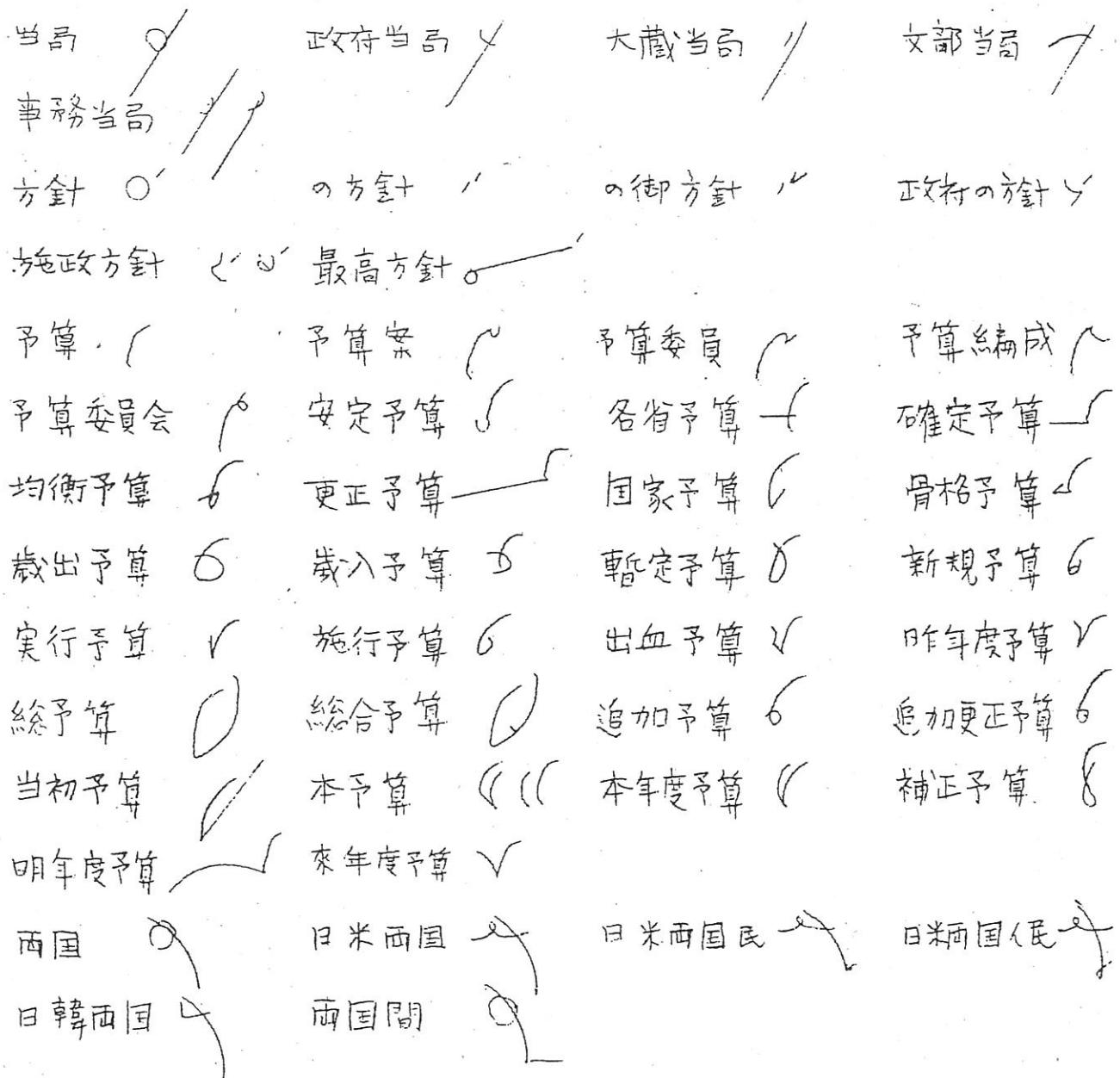
のまで書いて上に線を引く			
怨嗟の声	丶)	九牛の一毛	丶)
漁夫の利	人		
決河の勢	の	破竹の勢	△
吳下の阿蒙	ア		
空谷の跫音	——	浩然の氣	——
烹竜の袖	一		
春秋の筆法	丶)	數奇の運命)
焦眉の急	ノ!		
晴天の霹靂	△	椽大の筆	丶)
舉家の狗	ア		

略字 1

安定	○	生活安定	×	経済安定	+	の安定	×
意味	○	ある意味	。	その意味	→	この意味	。
といふ意味	○	といふ意味	—	無意味	○	○	—
関係	○	関係大臣	○	関係各省	○	関係大臣	○
関係閣僚	○	関係団体	○	関係各団体	○	経済関係	—
各国	○	世界各国	△	政米各国	×	加盟各国	×
の関係各国	○	—	—	—	—	—	—
改革	○	行政改革	／	税制改革	＼	の改革	／
学校	○	小学校	／	中学校	／	高等学校	—
格差	○	地域格差	↓	価格差	→	—	—
機関期間	○	行政機関	／	金融機関	↑	冷却期間	—
銀行	○	日本銀行	—	地方銀行	+	都市銀行	△
金庫	○	産業組合中央金庫)—	農林組合中央金庫	—	—	—
協同組合	○	農業協同組合	→	漁業協同組合	→	—	—
組合	○	単位組合	↓	産業組合	↓	信用組合	↓
森林組合	△	農業組合	→	漁業組合	↓	—	—
計画	○	改善計画	○	産業計画)—	工業計画	—
港湾計画	—	築港計画	—	—	—	—	—
国家	○	産業国家)—	工業国家	—	日本国家	—

福祉国家 ←	諸国家 →		
省 ○	大蔵省 ！	外務省 一	文部省
厚生省 —	運輸省 ！	労働省)	農林省)
郵政省 (建設省 一	通商産業省)	通産省)
商工省 /	海軍省 一	陸軍省 ?	農商務省 ?
司法省 !	法務省 (内務省 一	通信省)
諸国 ♀	政米諸国 ✕	AA諸国 ✕	アジア諸国 ✕
中南米諸国 ✕			
新聞 ○	五大新聞 一	朝日新聞 ハ	毎日新聞 一
読売新聞 ハ	東京新聞 ハ	地方新聞 ハ	
政策 ○	社会政策 ハ	金融政策 ハ	対外政策 ハ
経済政策 →	放漫政策 ハ	労働政策 ハ	基本政策 ハ
農業政策 →			
声明 ○	政府声明 ハ	累次の声明 ハ	の声明 ハ
整理 ♀	行政整理 ✕	財政整理 ✕	企業整理 ✕
事業整理 ✕	の整理 ✕		
整備 ○	事業整備 ハ	企業整備 ハ	再建整備 ハ
指數 ♀	生産指數 ハ	物価指數 ハ	
制度 ○	行政制度 ハ	地方制度 ハ	この制度 ハ
制度審議会 ○	行政制度審議会 ハ	の制度審議会 ハ	

大臣	○	総理大臣	丶	内閣総理大臣	○	外務大臣	—
大蔵大臣	；	厚生大臣	—	文部大臣	—	運輸大臣	—
通商産業大臣	↓	通産大臣		法務大臣		建設大臣	—
各大臣	—						
体制、態勢 大生会	○	産業体制	○	経済体制	—	国内体制	○
安保体制	×	安全保障体制	○	日米安全保障体制	×		
日米安保体制	×	の大勢	—	受け入れ態勢	—		
団体	○	公共団体	—	産業団体	○	地方団体	✓
地方公共団体	✗	各団体	—	各種団体	✗	革新団体	✗
外部団体	—	友誼団体	✓	出捐団体	✗	の団体	✓
対策	○	失業対策	✓	災害対策	✗	の対策	✓
的(1)	○	(例)悲観的	✗	樂觀的	✗	目的的	✗
的(2)	○	圧倒的	✗	一般的	✗	画期目的	—
画一的	—	間接的	—	基本的	—	具体的	+
経済的	+	国際的	✗	根本的	—	実際的	+
積極的	✗	絶対的	✗	政治的	✗	実体的	✗
消極的	✗	総合的	✗	財政的	✗	大旨的	+
抽象的	+	徹底的	—	直接的	—	文化的	✗
物質的	✗	発展的	✗	排他的	✗	盲目的	✓
民主的	✗						



この種のものを作ると相当の数のものがまたできるが、それは時の流れによって言葉の頻出度、新語が造られていくので、それに見合って各自が工夫すればいいことになります。

ここに掲げたものは、現在的時点において頻出度の高いものばかりをとりあげました。

名詞 略字

あがく	山	曉	山	あり方	人	有様	人
天降り	の	あげ足	の	揚げ超	人	足並み	人
あけつはなし	山	あたって	山	足踏み	人	足元	人
あと始末	山	あと回し	一	あと残り	人	穴埋め	人
歩み寄り	の	洗いざらい	山	アジア	山	アフリカ	山
アジアアフリカ	山	アジアアフリカ會議	山	アメリカ	人	アルゼンチン	人
今	。	勢い	山	一般	○	一部	人
一部分	ノ	異議	山	命	人	意味	○
意味合い	ス	一例	山	一昨年	?	一昨日	?
一生懸命	一	意氣込み	山	行き届み	一	一辺倒	人
一足飛び	山	入り会い	三	入り会い権	三	委員	人
委員会	山	一般会計	一	一度	ノ	イギリス	人
イタリー	ノ	イタリヤ	ノ	アラビヤ	山	委員長	○
運輸	ノ	受け入れ	山	受付	ノ	受け渡し	人
；しき	ノ	しき向き	山	埋め合わせ	ノ	埋め立て	人
運動	○	運輸省	！	運輸大臣	！	運輸委員会	人
影響	く	衛生施設	飞	オーストリア	く	オリンピック	人
大蔵	山	大蔵委員	一	大蔵委員会	人	大蔵省	人
大蔵大臣	；	男	一	女	一	大雜把	人

卸売	○ 卸売物価	○ お祭り	△ お祭り騒ぎ
欧洲共同市場	△ ユート	○ エンゲル係数	△ 印度
IMF	× エカエ(EGAE)	△ EEC	△ WHO
貢献謀求	△ 革命	△ 闇営	△ 闇営懇談会
会期延長	○ × 陽離	○ 官房長官	= からだ
からくり	△ 肩透し	△ カルテル	△ 可能
勝手気合	○ 官紀清正	△ 空念佛	△ カロ宣言
株式	△ 会社	○ 株式会社	○ 株主
株主総会	△ 為替	△ 為替相場	△ 為替レート
関係	○ 學識経験者	△ 損失	△ 緩急
会計検査院	△ 開発	○ 改善	○ 学術
科学技術省	△ 肝要	△ 核兵器	△ 核装備
核武装	△ 外貨準備	△ 外貨事情	△ 積極労働
稼働日数	△ 積働人口	△ 外貨	△ 公

外国向付: ○ △ 過去発送石炭

外見点 →

印度支那 ~ ~ インドネシア ~

基礎楚	△ 基本	△ 議論	△ 疑問
議長	○ 企業起業	△ 希望	△ 緊急

緊急質問	○	協賛共産	✓	金融	○	基礎	—	
企業配当	○	希望	—	氣の毒	△	極度	○	
極東	○	漁村	○	漁民	△	縫越し	—	
縫越し明許	—	組合させ	○	縫上げ	—	縫下げ	—	
縫返し	—	黒字	○	具体化	—	原因	○	
結果	○	経済	○	—	経済開発	—	経済企画庁	—
経済企画庁長官	—	減価償却	—	原価計算	+	憲法	○	
建設	—	原案	—	決算	?	決算委員	?	
決算委員会	?	建設委員	—	建設委員会	—	研究	—	
原子力	?	原子爆弾	?	結論	>	決意	—	
決議案	?	決心	?	総統請正	—	国会	—	
国際	—	国務	—	公共	—	公共投資	—	
国家公務員	—	公務員	○	国民	△	國務、心	—	
子供	△	言葉	—	腰だめ	?	答元	—	
心得	—	こじらえ	—	心構え	—	根本方針	—	
号条約	○	817号条約	—	小売物価	—	物価指數	—	
根本精神	—	国民健康保険	✓	国際連合	△	国交正常化	—	
国内	—	殺し屋	—	国際政治	—	事務	—	
後進性	—	米	—	公勞博	—	公勞委	—	
国際委員会	—	厚生	—	厚生委員	—	厚生委員会	—	

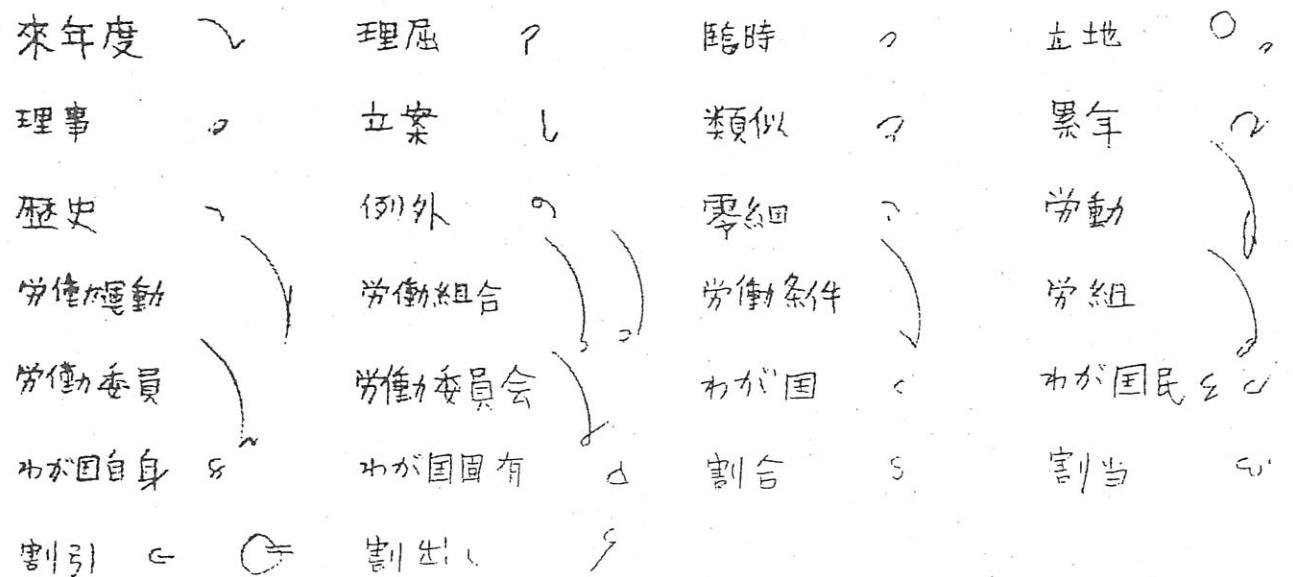
交渉	考慮	御考慮	考慮中
御質疑	購買力	公明	国内向け
歳出	歳入	歳入歳出	昨年
昨年度	賛成	再検討	採択
採決	在日米軍	在日アーレ軍	指図
三公社五現業 35	最終	最終的	最終責任
参議院	参議院議員	再編成	差押元
差支え	差向き	財政	財源
再建	財政計画	財政政策	財政資金
財政投融资	産業投資	概算	最高裁
最高裁判所	再三再四	最小	最大
最小限	最小限度	最大限	最大限度
最初	最終	差詰め	早速
在外公館	芟除	榨取	最近
採算割合	三権分立	策動	錯綜
作付	衆議院	衆議院議員	両院
無参両院	商工	自治	支出
仕事	事実	事業	実質
實際	承知	处置	自分
自動車	状態	次第	時代
130			

事態	○	十分)	+ 分)	市長	○
市町村	△	市町村長	○	自治体	△	主義	○
常識	○	所要	+	自由	,	自由化	△
消費	✓	消費者	✓	重要	△	重要性	○
自由世界	△	縮小)	実現	+	審議	△
審議会	△	殖民地	△	食糧	△	食料品	△
終始一貫	○	春窮期	△	司法	,	人事院	△
自由民主党	○	自民党	△	社会党	△	上程	○
条約	○	条文	○	質問	△	質疑	○
実効	✓	実効税率	✓	賃明生意書	△	序の口	△
收入	○	政府	△	政治家	△	政府委員	△
説明	○	説明員	△	選舉	○	選挙区	△
選挙運動	△	統制	△	生産性	△	生産性向上	△
生活	△	生活保護	△	世界平和	△	成立	△
世界	○	世界情勢	△	絶対	△	整理	△
整備	△	折衝中	△	整備拡充	△	生産過剰	△
制度審議会	△	責任	△	それ自身	△	それ自身	△
措置	△	処置	△	総選挙	△	底入れ	△
総理	✓	統裁	△	総務長官	△	総理府	△
総理府総務長官	△	但し書	△	耐用年数	○	耐久	△

耐久消費財	↓	太平洋	↓	大都市 大統領令原	↓	大同团结	ト
建物	↓	建前	↓	たぶん	✓	だいぶ	△
だいぶ	↓	大部分	↓	立場	↓	多數	✓
多數決	✗	対立	↓	対日	↓	大統領	○
太政官布告	↓	団体交渉	↓	地方	↓	町村	○
秩序	↓	調査	↓	抽象	↓	中小工業	△
中小企業	↓	中小商工業	↓	治山	↓	治水	△
治山治水	↓	長官	↓	経済長官 経済高官	↓	積立	↓
通産	↓	通商產業	↓	通常国会	↓	追加	○
提出	↓	委員	↓	徹底	↓	徹頭徹尾	△
手続	↓	適当	○	低賃金	↓	テレビ	△
適切	○	遙信	↓	鉄道	↓	提起	△
提議	↓	提示	↓	停止	↓	定置	↓
適任	○	提案	↓	てんてこ舞い (天てこ舞い)	↓		△
独立	↓	独立採算	↓	独立採算制	↓	道路	↓
同僚	↓	都道府県	↓	当然	↓	東海	↓
当該	↓	東西	↓	東西陣営	↓	特別	△
特別会計	↓	特別委員	~	特別委員会	△	道理	↓
討論	↓	突如	↓	特殊	↓	内閣	△
何が△	→	納得	○	斗争 小競争 (おにゆうせう)	→	左し崩れ 左まくら	△
132							

内容	し	梨の石渠	し	内外	し	何分	△
内閣総理大臣	○	左まけ者	○	内務	一	日本(ニホン)	△
日本(ニホン)	○	日本銀行	△	日銀	△	入手	△
日米	△	日米間	△	日韓	△	日韓会談	△
日程	○	日程第三	△	懲心	△	値上げ	○
値上がり	○	値下げ	○	値下がり	○	年次計画	△
年度計画	△	年間	△	年度	△	年次	△
黙意	△	農業	△	農協	△	農山	△
農山漁村	△	農山村	△	農村	△	農民	△
農民運動	△	農林	△	農林漁業	△	農家	△
農林委員	△	農林委員会	△	伸ば悩み	△	延べ払い	△
延べ払い方式	△	農商務	△	詰	△	端境	△
端境期	△	背後	△	財市結構	△	發展	△
発見	△	發言	△	払い超	△	人	○
必要	○	評価	△	人々	△	人づくり	△
人手不足	△	引き継ぎ	△	標準	△	不都合	△
物価	○	不可能	△	不可解	△	不適当	△
歩積み	△	歩積両建	△	福祉	△	文教	△
物価騰貴	△	不手際	△	不法行為	△	別	△
片務的	△	結成	△	締成特典	△	平和条約	△

ほんと	。	方面	〇^	方針	〇'	補助	6
補助金	6	補償保険保証	〇	報奨	6	方法	〇"
保守	6	保守革新	6	法務	(本会	6
本會議	6	本案	6	法案	〇"	法律	〇'
法律案	〇"	本法案	(本法律案	6	本法	6
本年	6	本年度	6	間違い	-	まじめ	6
満更	7	漫然	2	丸裸	~	前向き	~
待ち構え	6	見込み	~	見越し	~	見通し	~
認	6	民主化	—	民間	—	民社党	6
民主社会党	6	無関係	—	無期限	+	矛盾	2
夢	6	無期延期	6	命令	—	目下	〇
問題	〇	毛頭	~	目標	7	文部	6
躍進	〇"	輸出	7	輸入	6	輸出入	6
友邦諸国	6	輸入制限	6	輸入超過	—	輸出超過	—
要求	7	容共	7	ヨリゴのみ	6	翌日	6
予算	6	予算案	~	予算委員	6	予算委員会	6
予算編成	7	予算決算	—	ハセの中	6	合分	6
世迷い言	6	乱離佳久敗	~	ラツシユ	6	乱用	6
濫觴	6	乱療乱診	6	ライ麦	6	ランニンク	6
雷同	6	ラジオ	6	楽観	6	楽観	6



代名詞

字符串の構成法は、言葉が大体対蹠的でできているので、字符串の形も対蹠的組み立ての方法をとると記憶しやすくなります。もともと古昔の言葉といふものは音韻的に規律し縛ることのできにくいまの在りて、勢い略字の形となります。

対称	あなた	/	あなた方	/	皆さま
	みんな	/	皆さん	/	皆さま方
自称	私	/	私ども	/	私たち
	僕	/	僕たち	/	僕ら
	われわれ	/	われわれども	/	自分

	自分たち	自分ら	他称	彼	— 彼ら	— かれ
不定称	だれ	/				
近称	これ	— ここ(筆順の)	この			
	これら	— これら	— こっち	こっち	○	
中称	それ	— そこ(筆順の)	その			
	それら	— そちら	そっち	そっち	○	
遠称	あれ	— あちら	あの			
	どれ	— どの	どっち	どっち	○	
不定称	いずれ	～ いすこと	どこ	何	～ 何ら	～ 何らか
						○

略字の基本的なものは以上のとおりであります。他品詞と結びつけて考るといいものもあります。ここには三つばかりあげておきましょう。

点と結びついた略字として

この点 ～ その点 ～ どの点 >

数字 言詞

数詞の頻出度といふものは、音声言語の内容の如何によつては、きわめて低いものであります。予算や決算など、特殊なものにおきましては、すこぶる高くあるものであります。しかも数詞といふものは、符号から文字言語への転換に当たつて許容度といふものがあります。ありますをあらと表現しても、間違いであっても想ス旨は変わりませんが、数詞は位どりを間違えてはいけませんし、一錢たりと扣除することは信憑性を失う因になります。

そこで、その元に在る数字の文字は小学生の時代から書き馴れているアラビヤ数字を使って、数字に確実性を求めるのであります。アラビヤ数字は音数の割に字画が複雑過ぎます。

たとえば一音の数字を見ますと

2 4 5 9 (ク)

であつて、二音の数字は

1 3 6 7 8 9 (キエウ) 10

であります。

以上を見れば分かりますように、音数が一音である画数が一画のものは一つもありません。大方は二画または三画であります。

4 5 に至つては一音で画数は三画であります。7 は二音で三画であります。

一音一画をもつて書記しても速度の高い音言語の記線運動に困難を感じる速記に、一音三画を要したり二音二画を要する文字を使い、しかもその上に、兆 億 万 千 百 の位どりの記号までそれを重ねつけろとすれば、音言語の速度が早くなければならないほど比例して記線能力は落ちてくることは当然であります。

アラビヤ数字を使用する限り数詞を多量に含む音言語においては音数 < 画数 の状態となるのであります。

この状態を 音数 > 画数 になるように改善するには速記符字に依拠するのがよいと考えたのであります。

この考え方に基いて作ったのが以下に掲げる数字であります。

この符号の大きさは、百位 千位 は長音符字の大きさで、他は特殊な小符号の外は基本符字の大きさであります。

位	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九
一	〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九
十	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一
百	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一
千	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一
万	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一
十万	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一
百万	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一
138	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一

位	〇	-	一	二	三	四	五	六	七	八	九
千万	二	一	〇	一	〇	一	〇	一	〇	一	一
億	一	五	一	四	一	三	一	二	一	一	一
十億	十	一	五	一	四	一	三	一	二	一	一
百億	八	一	〇	一	〇	一	〇	一	〇	一	一
千億	〇	"	〇	一	〇	一	〇	一	〇	一	一
兆	一	二	一	三	一	四	一	五	一	六	一

数のつくもの

	十	百	千	万	十万	百万	千万	億	兆
数	()	((6	6	6	6	6

数字綴り例

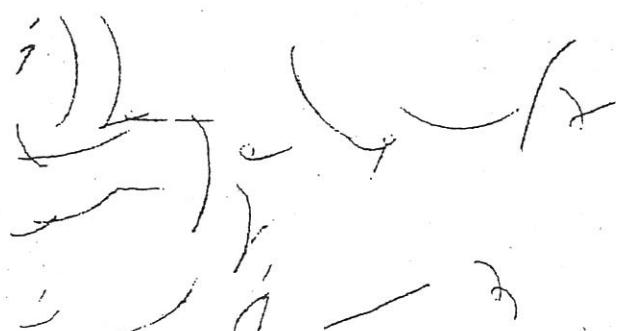
兆千百億千百十亿万千百十一

133598712465

82312

202090304

220415000066



数字の直前直後に詞のあるもので、数字の順数のものは、後の詞を省略できます。また、後の詞を書くにしても最小限でとどめることができます。

綴り字例

昭和 39 年 4 月 18 日	午前	345	345
午前 11 時 30 分	午後	去年	今年
3割 5分 4厘 2毛	十	昨日	一
大正 12 年 9 月 1 日	一	5 万至 6	一
明治 15 年 10 月 28 日	二	八	
第一・四半期	二	第二・四半期	三
第三・四半期	三	第四・四半期	四

略字

回、階	○	回	○	年	○	月	○
力所	○	力	○	町村	○	日	○
キロ	○	キロワット	○	キロワットアワー	○	キログラム	○
国、石	○	号	○	上半期	○	下半期	○
尺	○	条	—	町	○	町歩	○
坪	○	トン	○	ドル	○	日(=4)	○
%	○	プロセント	○	パーセンテージ	○	分の	○
倍	○	マイル	○	万円	○	余万円	○
余用	○	年	○	年度	○		

綴字例 とその応用

五ヶ国會議 一 72 万町村 一 133 万円 () ()
 今年か来年は 一 昨年でしたか一昨年でしたかの 一
 来年も再来年も 一
 140

成 言語 用各字 と きまり言葉

あに図らんや	。 打つて変わつて	ナ
中らすといえども遠からず	。 移り變わり	ル
当たらずさわらず	。 いへあるか李	リ
意義深いもの	。 打つて一丸とする	ナ
遺憾なきを期する	。 ナ	ナ
期したい	。 惑嗟の声	ニ
期して	。 遅かれ早かれ	ル
殷金監遠からず	。 屋上屋を架する	一
陰に陽に	。 思い半ばにすぎず	ト
いざ知らす	。 寛儀よろしきを得て	タ
いかくんぞ知らん	。 得る	ナ
一か八か	。 得まして	タ
一糸乱れず	。 飼犬に手を咬まれる	ル
入るを量つて出するを制す	。 咬まれた	ル
制する	。 頭の輕重を問われる	ル
有無を言わす	。 問われた	ル
言わすない	。 問われて	ル
有無相通する	。 問わるる	ル
通じて	。 固唾を呑んで	ル

仮すに時をもつて	フ 詭弁を尋する	フ
摺てて加えて	ヘ 善して	ヘ
加えまして	○ フ 騎尾に付いて	ハ
寡聞にして	ヘ 付しまして	カ
貸倒れ準備金	ア 奇貨おくべし	ク
画餅に口帰する	フ 木に縁つて魚を求める	ハ
口帰して	ヘ 求まる	ハ
口帰した	ヘ 緊急やむを得ず	ハ
画竜点睛を欠く	フ 得在い	ハ
眼光紙指に徹する	ア 得ません	ハ
間然するところなし	一 一 得人	ハ
ところがない	二 得在かつ左	ハ
間髪を入れず	二 接を一にする(軌)	ア ヤ
完膚なく	ヘ して	ヘ
生きまで	ヘ しまして	カ
隠ヒリ始めよ	フ 狂漢を既倒に回す	カ
火急的速かに	フ 九條の功を一晩に虧く	カ
速かに	ヘ 奇貨として	ハ
期してまいり所存	ア 遊賭しがたい	ハ
暮年をさすして	ヘ 騎虎の勢い	ハ

危殆に瀕する	山	衰竜の袖に隠れて	ス	ス
胸襟を開いて	人	高閣に束ねて	ス	ス
靴を脱ぎて痒きを搔く	一	束ねる	ス	ス
堅白同異の弁	二	細大漏らさず	ク	ク
口角あわを飛ばす	一	漏らさない	甲	甲
飛ばして	一	賽の河原	ス	ス
膏血をしぶる	一	砂上の樓閣	ス	ス
しぶって	二	廣幾ある	ク	ク
事もなげに	一	して	ス	ス
後顧の憂い	一	所期の目的	ス	ス
憂え	一	死命を制する	ス	ス
背筋に当たる	二	制して	ス	ス
当たっている	二	制しまして	ス	ス
当たつた	二	知らず知らず(詩)	○	○
五十歩百歩	カ	焦眉の急	ス	ス
これを要するに	二	信をおきがたい	ス	ス
経過並に結果	二	信じがたい	ス	ス
及び	一	小異を捨てて大同に就く	ク	ク
と	二	喪家の犬	ス	ス
講ずることに	一	宋謡の仁	ス	ス

死屍にむちうつ	死	隔靴化搔痒の感	
死屍の歯を数える	死	大山鳴動して鼠一匹	ノ
十把一からげ	ノ	端倪すべからず	フ
衆寡敵せず	ノ	すへからざる	フ
首鼠兩端を持する	ノ	頂門の一針	〇
春秋の筆法	ノ	大同小異	ハ
背に腹はかえられず	ノ	頭角をあらわす	ノ
かえられまい	ノ	掉尾の勇をふる	ノ
林鑿相容れず	ノ	ふるいまして	ノ
その縁に沿つて	一又		
沿いまして	ノ	屠所の羊	ノ
大同につく	ノ	塗炭の苦しみ	ノ
全員一致をもつて	又	泣いて馬謖を斬る	ハ
もちまして	ノ	左の袖は振れない	×
対処してまいり	ノ	振れません	ノ
まいりたい	ノ	に開いた法律案	〇
する	ノ	二階から目薬	ノ
して	ノ	似ても似つかぬ	ノ
貧困に慎んで、怪しからん	ノ	似つかない	+
長革便馬腹に及ばず	ノ		

角を矯めて牛を殺す	レ	百も承知	6
度止するところを知らず	△	水炭相容れず	6
知らない	×	覆水く盆に返らす	6
知りません	→	符節を合わす	6 6
能事畢 <small>お</small> われり	→	不肖圖 <small>ふしょ</small> りあれ	6
万全の努力	△	必要なくべからざる	6
策	△	ことのできまい	6
反覆常なし	△	伝家の宝刀	6
背水の陣	△	満場一致をもつて	6
反間苦肉の策	△	もちまして	6
半畳を入れる	△	枚等に違あらず	6
いと方存らず	△	まことに遺憾	6
存らぬ	△	稀に見る	6
存りない	△	まかり間違えば	6
火を見るよりも明らか	△	廻り廻つて	6
より明らか	△	元の木阿弥	6
百尺竿頭一步を進めて	△	野人れに存りあず	6
進めまして	△	佛作つて魂入れず	6
百年河清を俟つ	△	を入れまい	6
日暮れて道遠し	△	羊頭狗肉	6

羊頭を掲げて狗肉を売る

外国語音符字

よりよい、よろしくございます

tʃeɪ ʃeɪ dʒeɪ

よりよき

ʃeɪ dʒeɪ

よろしくございませか

ʃeɪ ʃeɪ

有終の美をなす

ʃeɪ ʃeɪ

遠原の火

ʃeɪ ʃeɪ

隣を得て蜀を望む

ʃeɪ ʃeɪ

符標の例

会議には正規発言不正規発言、発言者の身分、状況等を速記用紙に書いておかなければならぬものが山あります。会議の始めには

議長	①	副議長	②	委員長	③
副委員長	④	主査	⑤	副主査	⑥
理事	⑦	代理	⑧	公述人	⑨ ヘタロ
参考人	⑩ △	証人	⑪ △	政府委員	⑫ △
大臣	⑬	説明員	⑭	専門員	⑮
状況描写として	△	笑声	△	起立	△
拍手	○	議場騒然	一	聴取不能	△
交替	×	速記中止	↓	発言する者多し	△

ヒ呼ぶ者あり として 会議録に表記しなければならぬものには
のよるなものがあります。、

「要議なし」と呼ぶ者あり

①

「異議あり」と呼ぶ者あり

ハ

「賛成」と呼ぶ者あり

又

「反対」と呼ぶ者あり

乙

「ヒヤヒヤ」と呼ぶ者あり

○

「ノーノー」と呼ぶ者あり

又

「休憩」と呼ぶ者あり

丁

「議長」と呼ぶ者あり

ノ

「委員長」と呼ぶ者あり

ハ

以上の外、許可を得ない発言は、時の状況によつて、発言部分を

○によって囲んで表現するとか、速記用紙の左側
三分の一の部分を空白にして、何行にわたる発言でも速記をして、
その発言の種類を表示する方法などもありますが、これらは各自の
好みもあることなので、この方法でなければならぬといふもので
はありません。

終

綴字例

Ⅳ. 1

土地収用法等の一部を改正する法律案の趣旨を説明いたします。最近における公共事業に必要な用地の取得は、事業量の著しい増大に伴い種々の困難が生じております。このような公共事業の用地取得難を打開し、公共事業を円滑、かつ、迅速に施行するためには、地価対策その他総合的な施策を必要とするとは申すまでもないところですが、公共用地の取得制度自体についても検討を加えました結果、収用委員会の機構、収用対象の範囲、収用手続その他の点についてさらに整備を要する点があると考えられますので、今回この法律案によりまして、土地収用法、公共用地の取得に関する特別措置法及び都市計画法の一部を改正することとしたいたしました次第であります。次に、この法律案の要旨を御説明申し上げます。第一に、収用委員会を充実強化するため、政令で定める都道府県においては常勤の委員を置くことができることとし、地方公共団体の長、議会の議員及び常勤の職員は、委員と兼任ができないようになりますとともに、収用委員会の事務を整理させるための専任の職員を置くことができることにいたしております。

(昭和39年4月24日参議院会議録第19号 549頁 国務大臣河野一郎君の土地収用法の一部改正の提案の趣旨説明)

N o. 2

それから、O E C D の問題につきましては、確かに二年間の猶予期間がありますが、これが業界に対する一つの刺激にもあるだろ；と思ひますし、また、一つの国民自身が貿易外収支の改善といふものに対して本腰を入れなければならぬいといふ、政府に対する鞭撻、理解にもあると思いますし、政府も、もちろん五年間が二年間に短縮せられるといふことに対して、そのよろを財政措置、金融措置、あらゆる立場からの貿易外収支改善に対して施策を立てなければならぬいわけであります。またこの問題を、総合的な施策を行なうことによって、一日も早く貿易外収支が改善をされて、経常収支において黒字が出せるようには、また、その黒字によって過去の資本収支の返済にも充てられるようになる日こそ望ましいのであります。これとまつこから取り組んでいるわけであります。それから日米問題につきましては、これはもう十分検討いたしております。シップ・アメリカン、バイ・アメリカン、こんなことをいつて一体いいのですかということを、去年の九月の IMF 総会に出たときに、非常に強くこの問題に対しては日本側の意思を申し出であります。

(昭和三十九年二月十二日参議院予算委員会会議録第3号16頁引)

大臣田中角栄君の答弁の一節

21) λ starts at 18, so
we have $\lambda = 2$, $\nu = 1$.
So $\lambda^2 \approx 28$ is a left bracket.
 $\lambda \rightarrow \lambda^2 \approx 28$ is a right bracket.
and so $\lambda^2 \approx 28$ is a right bracket.
 $\lambda^2 \approx 28$ is a right bracket.

N.0.3

第二に、O E C Dに入るにあたつての国内的な体制の準備が十分であるかどうか伺いたいのですが、これは時間がございませんので、こういふ問題についてはもしろ関係大臣にあとで詳しく伺うことにして、加盟にあたつての心がまだといいますか、岡田委員の質問に対する答えにありましたか、これを伺いたいのです。といふのは、この目的をいまどういうふうに考えているかということに関連するのですが、やはりどうしてしまだO E C Dの中にヨーロッパ、特にE E C的閉鎖的性格が残っていると思うのですね。そういうものに対しては強く開放性を主張して要求していく。それから一方においては、特に海運問題であらわれているように、アメリカなりフランスなりが非常にある意味ではわがままな横車を自国主義——シップ。アメリカンとかいろいろ自國中心主義が、存外O E C Dの場合によつては明白に承認する。そういう点を集團討議の形でどんどん直せるとこは直していく。こりうる在心がまえがまえが必要だと思うのですが、その点についての経理のお考えを伺いたい。

(昭和39年4月23日外務委員会会議録第17号6頁曾祢益沼)
の質問

is 18 (K.L. 74) + 0.2 =

20.2 --- $\rightarrow T_1 - z_1' |,$

$\rightarrow 2150 \text{ foot} |, (T_1) \rightarrow h^*$

$\rightarrow 2150 \text{ foot} |, (T_1) \rightarrow h^* \text{ P. 21}$

$\rightarrow 2150 \text{ foot} |, (T_1) \rightarrow h^* \text{ P. 21}$

$\rightarrow 2150 \text{ foot} |, (T_1) \rightarrow h^* \text{ P. 21}$

$\rightarrow 2150 \text{ foot} |, (T_1) \rightarrow h^* \text{ P. 21}$

$\rightarrow 2150 \text{ foot} |, (T_1) \rightarrow h^* \text{ P. 21}$

No.4

一方歳出につきましては、予算額ニ非五千六百三十億円余に昭和三十六年度からの繰り越し額六百四十六億円余を加えました予算額ニ非六千二百七十七億円余から支出済み額ニ非五千五百六十六億円余を差し引きますと、その差額は七百十一億円余でありますて、そのうち、翌年度に繰り越しました額は、前述のとおり百八十八億円余と存っております。なほ、翌年度へ繰り越し額の内訳を申し上げますと、財政法第十四条の三第一項の規定により、あらかじめ、国会の議決を経、これに基づいて翌年度へ繰り越しましたのは四百九十五億円余、財政法第四十二条ただし書きの規定により追受けがたい事故のため翌年度へ繰り越しましたのは六億円余であります。次に、不用額のおもなものは、食糧庁の国産大豆等保護対策費につきまして、昭和三十六年産大豆の交付金の交付基準となる標準貿易価格の決定遅延で、その費途及び金額につきましては、その御審議をいたたまはず際、御説明申し上げることにいたします。

(昭和 39 年 2 月 12 日 第 40 回 参議院決算委員会会議録)
(第 2 号 2 頁 政府委員齋藤邦吉君の説明)

$\{ \} \times \{ \} \rightarrow \{ \} \times \{ \} \times \{ \}$
 $\{ \} \times \{ \} \times \{ \} \rightarrow \{ \} \times \{ \}$
 $\{ \} \times \{ \} \rightarrow \{ \} \times \{ \}$
 $\rightarrow \{ \} \times \{ \} \times \{ \}$
 $\{ \} \times \{ \} \times \{ \} \rightarrow \{ \} \times \{ \}$
 $\{ \} \times \{ \} \times \{ \} \rightarrow \{ \} \times \{ \}$
 $\{ \} \times \{ \} \times \{ \} \rightarrow \{ \} \times \{ \}$
 $\{ \} \times \{ \} \times \{ \} \rightarrow \{ \} \times \{ \}$

速記教本

昭和39年8月29日 謄写完了

著者 畑田 明

印刷者 黒田 武夫

参議院速記者養成所